五大力

一

洲崎の廓の遠灯は、大空に幽に消えたが、兩側の町家の屋根は、横縱を遥る川筋の松の梢を、ほんのりと宿しながら、甍の霜に色冷たく、星が針のやうに晃々する。

月夜には浮かれ烏が、此の凄まじい星の光には、睛を射られて、ばらばらと溢れても落ちやう……鎖した門の堅いのが、引裂けた巖か。と見えて、寒さも蓬々しい、樹立の下なる八幡宮。

其の奥には、柳の折れた渡船がある筈、千鳥の路も絶えぐか……橋に蹴

躓いたやうに鳴く聲も、其のまゝ氷る辻占である。

「あゝ、寒い。」

と車の上で白い呼吸。樹から落ちた其の烏のやうに、黑い外套の袖を窘めて乘つて、現々と睡つて居たのが、いま宮の前を越した處で、車が不意に留まつたので、はつと、冷い觀世紙捻で鼻を突かれた體に目を覺ました、我家の戸だと思つたらう。

「早いな、最う來たかい。」

車夫は、燻りも霜に冴えた茶飯屋の行燈の白い影に、ひしやげた帽子の茶な奴を見せて、ト櫓を突いた形に、威勢よく楫を張つたまゝ振向いた。

「へい……八幡を通つたばかりなんですが、一寸、蠟燭を買ひますんで、」

肱で一ッ極め直して、

「おい、一挺だ、出してくんねえ。」

「こりや、お寒いに、御苦勞樣でございます。」

と古風な世辭を云ふ。大縞の寢々子を着た親仁。拔け湯の如く店を這ふ蒸氣の中から、指を錢のやうな格合で、一挺痩せた處を握つて渡す。

「旦那、小いのゝ、お持合はせは？」

……廓から點けて出た、其ばかりは景氣ら燃えさしの香を芬とさせて、しいのに、新しく繼たして、きりゝと看板の名どころを見せて持直したは可かつたが、見得に衣嚢を探らうともしないで、爾く——小いのは——と出た處は、はじめから若いもの錢なし也。

客の方も、一言のもとに極めて潔いものであつた。

「無い。……」

と云つて、腰をがッくりと落した樣子で、

「ぢや、お釣錢をと云ふだらう。……勿論、それも無い。荒物屋で貸さな

いか。」

「へい、否。」と車夫、あやふや。

「外套を着て居るせ、外套を、」
と疊みかけて、
「質に置いて行くが何うだい、荒物屋、貸さないか。」と其の癖、腕をぐい
と上げて袖を合はせる。
「醉つて居らつしやら、旦那、茶めし屋でさ。」
「あゝ、茶めし屋か。」
と乘出して、熟と視ながら、
「丁ど可い、一杯引掛けてと云ふ處だけれど、懷中に無いのを曉舌ッ了ッた、ちよつ、」と舌打、で、破軍を仰ぐ。
「決してお貸し申さない事はございません、ははゝ、」
と洞穴の白い蝙蝠の、ふわ〳〵な笑聲。
「最もね、蠟燭の質に外套ぢや、ダボ鯊で鯨を釣んだ、何しろ脱がうよ。」

二

「串戲ぢやありません。」
酒がさせるか、發奮に掛つて、實際脱ぎさうなを、車夫が見ると、帽子の下を横拳で、引擦つて、
「出掛けに――お氣を着け申しなよ――と、へい、（喜の字。）の婆さんに頼まれて來ましたんで、……酒落にも鎧を剝がせるなんて、そんなお前さん。べらぼうな。」
と唾をしたのを踵で蹈み、
「おゝ、小父さん、蠟燭代も持たねえつて、不要心過ぎたがね、實はね、おい、些とばかり何だ、其の……手慰さみを遣つて、からつけつで居た處を、大急ぎで仕事に出たもんだから、まだあつたと思ふ奴さへ、じり〳〵流込んで、此の始末だ。……勘忍しねえ。私の顔で、と云つたつて、賣れ

もしねえ面を、ぎつくり遣るやうで小耻かしいがね……曲りなりにも立てゝ貸して貰はう。私あね、松てッて、二丁目の濱定が部屋のもんだ、間違えはねえ。」

と赫と熱さうな氣焔を吐いたが、銀莚の出入りでなし、蠟燭一挺の挨拶なれば、其處等の枯芦の根に消えた、蟲が鳴くやうて尙ほ寂しい。

茶飯屋の隱居――と云ふ風――が又ぼやけた笑ひ。

「はゝはゝゝ、幾干がものだね。若い衆さん、顏もよく知つて居ますよ。心配をしなすつちや此方が恨みだ。酷い寒じだね、一杯引掛けておいてなさいまし。」

と早や硝子一個。

火を通して、茶色な處を、ぽつと突出す。

松は、ものをも言はず、引手繰つて、

「ほう、成田樣の御利益だ、活返らあ。」とゴク〻と煽る。

「此を見て堪りますか、醉醒の空腹と來た。うしろ向きの遊女を買つた歸途、寒威骨髓に徹し助からん。……何うせ、掛賣升なら、私が被る。五臟六腑へお互に熱いものを浸渡らせて行かうぢやないか。若衆、下りやう。」

と云ふ。……言腰にも力が入つて、楫はぴたりと着く。

ドンと出たが、蹌跟。

「危い、旦那、」

「大丈夫……貸すかい。」と緩簾を拂ふ、湯氣に白けた優しい顏。袖に霜は置きながら、白無垢ではないらしい。が、洲崎街道の茶飯屋には山の手過ぎた二十七八。

な突支棒に、松は傍へ押並んて、

「達引いて上げてくんねえ、御都合がおあんなさるんだ。（喜の字。）のお客んだぜ。」

これでもと言はないばかりに、……客人權現照らされて、思はず緩簾の

肩を後へ引く。
「古い引手茶屋でございます、新内の上手い婆さんで、」
と酒を注ぎながら、じろりと視て、
「御仁體で居らつしやる。」
「此は手酷いな。」
茶飯屋は口早に、
「否、如何な大盡長者でも廓の金には詰るがならひ、と淨瑠璃にもございます、……もし、其處が苦界さね。」
松は仰山な思入れて、
「眞個だなあ。……」
「いや、恐入ります。」
と目を外らして、若い客は行燈のちらしを讀む……
「茶飯、燗酒、小皿盛か、……おでんもあるね、……やあ、梅川……」と

うつかり高聲。
「おいらんは、へ、へ、御同苗でございますかい。」
「旦那、こりや、御馳走樣です。」と松は一串引摑む。
「御馳走はするが。……あゝ、いゝ燗だ。」
とぽつと呼吸して、
「名は違ふよ、何と云ふか。最も顏を見れば、似て居るかも知れないが、」
と附かぬ事を、沈んで云つた。

三

が、投げた調子で、
「處が全然うしろ向きだから、眉の寸法も分らない、實に變だつた。」と半ば透いた燗酒の、底が寂しさうに差俯向く。
松はおでんを横嘶えて、

「可加減な事を云つて居らつしやら。背後を向いたッ切なんて、そんな事が、お前さん。」

「其もね、」

尙ほ、自分で確めたさうに傾きながら、

「例のおひけと云ふのに成つて、其の後が、うしろ向きなら、勤番並と來て不思議はない。……それから通例三日月さ……宵にちらり。」

と目もちらり。

「其だつて、顏は見せます。三日月が二日月だつて、月の裏ばかり見たものは天文臺にも恐らく無からう。それが、しまひまで向ふむきさ。襟の掛つた、づんどの友染に、たぼと鬢を附着けて、龜甲羅芋を突支棒にしたと云ふ、變なものを見て來たんだから察して貰たいな。……最も對手を變だと云ふ、此方も少し何うかして居さうで無理もないがね。……恁うした、」

と云つて硝子盃を擧げた、袖の下を兩方透して、

「私も大分變だらう。」

茶飯屋は、客の胸を差覗いて、

「何か遺失品でもなさりましたか。」と實體な顏して訊く。

客の形は、實際遺失たか、掏られたかと思ふ、げつそり胸の痩せたものであつた。

「眞個だ。」

と松も氣の着いた顏色で、

「現々なすつてゝお前さん、途中で懷中でもお遺失しなさりやしませんかい。……よく、お檢べなさいまし、底へ辷つちや居ないんですか。召ものの裏が柔かだと、なあ、爺さん。」

「然うだとも。」ともつさり又覗く。

「體裁の可い事を……蠟燭代も持たない處で、氣休めの世辭は有難いがね、紙入を遺失したぐらいだつたり、袂を探して、有るか無いか見られるやう

なものだつたら、こんな變な氣に成りやしない。……酷い寒さだ。」

とぶるッとして、

「大變なものを遺失して居るんだ。」と眦が上つて、眉が顰むと、一度はつと出た色が又醒めて、切なさうに口を結ぶ。

「お遺失しなすつた。」

「旦那、何でございます。」と茶飯屋まで吃驚する。

また、顔の色が惡かつたのである。

睡氣を取つて棄てたさうに、右の目を引擦つて、

「慌てるな〳〵、ッて……云ふ奴が、此の通り狼狽へて居るんだけれども……遺失したのは今夜ぢやない。……去年霜月だ。……あゝ、」と悄然する。

「然うですかい。」

松は蹲んで、土の上に煙管を拂いた。煙も立たずカチリと鳴つた。路はカラ〳〵と凍てたらしい。

すぐに突込み、しやつきりと立ち、

「ぢや、まあ……何ですが、私あ（喜の字。）から頼まれて來てますから、知らねえ中にも、途中三界、御難儀があつちや成らねえ。分りませんまでも、曳いて來た路を搜しに戻らうかと思ひましたぜ。」

「餘程お大切なものでございますか。去年にしろ、まあ、何しろ……ねえ……何をおなくしなさいました。伺つても、お互に、なあ、車夫さん、分りもしまいけれどもよ。」

四

「……品と云ふのは、定紋付黒塗の箱へ、眞綿を敷いて、古金爛の嚢に包んだ……大切な道具なんだ。

――御承知でもありませうが、不思議な言傳へがあります、これは寶もの。途中お氣を着け下さいまし。……分けて此の邊は川筋です、河岸を御通

行の事、間違ひがあつては取返しが着きません、何分何うぞ――と恐しく念を入れて、私に手渡し爲たのが、此の何、冬木に住つてる繪師でね、……懇意づく、――其寶の持主の、私には母方の叔父に當る、駿河臺の苦虫から借りて居たのを――便宜で、私に托けて返さうと云ふんだ。

頼むものに事を缺いた……

死んだか、活きたか、音信の知れない、昔の戀が可懷しさに、ばかの目刺の名物を仕入れに來た半間な面で、山の手から電車に積まれて、えつちら、おつちら、……枯蘆の空へ白い太陽の出た深川を、(それ、千鳥だよ、)と功勞經た雀に小馬鹿にして飛ばれながら、ぶら〳〵歩行いて居た私に、又、そんな大事なものを持たせて返すつて云ふがあるもんか。」

ともの云ひも究放す……下駄の片足、露店御法度の大道火鉢、化けさうなのに踏掛けた。……客は此の時、松も一所に、帆木綿の薄汚れた、茶飯屋の圍の中、狹い縁臺に居たのである。

俠な松と、もじや〳〵の柏が、前後に立つて、殊勝にも附合ふ風情は、御近所なれば恐多いが、かの二體の御前立が、やれ〳〵不便や、と半ばゝ憐み、困つた男だ、と半ばゝ持餘して、體を引立てやうにもしつこしの無い、村芝居の文覺の、くだを卷くのを聞役の御光景。

「たゞし今だから、然うは云ふものゝ、誰も途中で出合ひ頭に、――これは何方へ、――と聲を掛けられて、影法師を探すんです、――と云ふものもないからね。――柄にはありませんが、深川の方へ越さうかと思つて、安値い、家を探しに、と云つたもんです。

繪師とは、川端で出逢つたんてね。――御覽なさい、湯の歸途、直き其處が住居です。お立寄り、是非、と云つて、私を家へ連込んだ。其家へ行つたのは、はじめてさ。先づ何はなくつても、で淡泊りと一杯出した。

御意は可で飲んだものです。

やがて、その寶の箱を恭しく持出して、其の代りお探しに成ります家は、

皆で尋ねて、早速お知らせ申しませう。何しろ御緩り、これよ、お熱いのを、と細君を呼んだがね。

既に托けものまで持出した後で、お熱いのでもござんすまい。大きに御馳走様、――斷つて歸ると成ると、お俥を、と云ふ。

叔父に借りた大事な品を、其の甥に持たせて返す……此のお俥は、決して口前ばかりでは無かつたれけども、今度は此方で寸法が狂ふんです。故々出て來た深川邊、これからと云ふ處を車で突返されて詰りますか。……惡く又乘つて出て、黒江町ぐらゐの處で、車だけ返さうものなら、立處に洲崎へぐれたと見當が着いて、一門の沙汰に成る。

頼むやうにして斷つた。車は血の道に障る、と云つてね。」

「措きやがれ。」

と人知れず自棄に呟いたのは、其處に、茶飯屋の前に乘棄てられた、矢幅が硝子のやうに透通るまで、冷渡つた俥である。乾びた木の葉でも飛んで乘れ、發奮に勝手に驅出さう。寒さに堪へざる狀を見よ、母衣の霜にも光を放つ。

五

腰て動いて、手を伸ばした、客人、又酒で、

「……するとね、繪師が、そんなにお厭ならお車は差上げますまい。途中電車まで提灯をお持ちなさいまし――は何うだ。人をつけ、如何に地理に暗ければと云つて、提灯とは推參な。……然も何時だと思ひます。」

と、ふと心着いたらしく、

「いや、時間と言へば、」

窮屈らしく、坊やの巾着と云つた手附で、外套の下へ突込むだが、

「ふゝん……今夜の軍用金に成つた癖に、」

と情なさうに苦笑して、

「爺さん、まだ……構はないかい。」
松が引取つて、
「御緩りなさいまし。」
「此からの婆婆でございます。……あの、通り一時途絶えましたのが、それ冴返つて參りました、」
と不動堂の方へ目を遣る、と廣袖の袖で横撫一つ。
それ、聞こゆは鈴の音……橋も川も飛ぶかと思ふ、虚空に響いて、
——懺悔々々——
と笛を吹くやう。
——六根清淨——
と太鼓を打込む。……霜を刻むや、氣競へる聲々。懺悔の鏨を水に刺して、清淨の掛矢を擧げつゝ、心の影を、明星の輝く光に、白く浮彫にするよ、
と響く。

——懺悔々々——
——六根清淨——
——懺悔々々——
熟と聞いて、
「懼悔どころか、迷足りない。……六根大不淨と來て居るからね、洗髪と云ふ横町を行くのに、尾花屋と書いてありや知らず、第一……繪師の提灯を持つは癪だらう。褌と提灯はぶら下げた事はありませんさ。其處を出たんだ。
丁ど五時頃、最も提灯には早過ぎたが、冬至前は四時に最う戸外だつて薄暗い。……處へ、其家を出ると間もなく、颯と云つて一降掛つた。
おゝ、雨だ。深川小春で、ほか〳〵するにも、些と、暖か過ぎた日だつけが、お誂への時雨に成つた。其の、二三日降續いて、晝頃お天氣に成つたばかり、蔭溶けはして居るし……歩行くと日中汗が出たくらゐだもの、

傘は持たないが、外套なしの足駄穿で居たんだから、氣の强さと云つたらない。

がら〳〵と鈴が鳴つて、背後で格子戸が開いたと思ふと、惡くお屋敷風に襟なしで白粉を塗つた、右の繪師が許の飯炊が、傘を持つて驅出した、私に貸さうと云ふ腹です。

來やがつた。誰が借りて遣るもんか、とくだらない我慢さね。何故か性が合はないで、不斷虫の好かない繪師でね、……其の癖、實を云ふと右の繪師も、のがれない中の緣續きなんだ。

一番すつぽかしを食はして遣らう。人生至る處靑山で、深川何處にでも出格子あり。時雨には廂を借るに限るんだ、と行合はせた、角が米屋の、暖簾を潜るやうにして、ふいと路次裏へ入つたもんです。

馬鹿だね。

蛇目を一本、腕相撲と云ふ袖で包へて、ト番傘を向ふ下りに、件のお三どんは、かた〳〵と通つて行く。……つひ目の前だ、けれども、最う暗いもの。

やがて、其のなりて、じよな〳〵と引返して、一度見返りながら、無駄に歸つた。

狀あ見やがれ。

けれどもね、路次に潜んだはお誂への出格子だのに、仇な横櫛でも懷手で覗く事か、經師屋の土用干見るやうに、づらりと乾したのが、嬰兒のおしめだらう、何うです。」

と落すやうに硝子盃を置いて、

「深川も人氣が惡く成つたぜ。」

六

「いや、串戲ぢやない。」

と半帕は……ても白かつた、唇をぐい、と拭いて、
「不了見も行留りな。岸といへば、朽れても柳で、偶としたら、……故と
ながらも恁うした雨宿りが縁と成つて、此の路次て出會すのが、昔馴染……」
ふと、星の光を、客は紙帳めいた中から透かして覗いた。
「私の名は、小彌太と云ふんだ。其の婦はね、此の行燈のと同一だよ……
爺さん、――梅川には、何か所説でも無いのかい。」
「へい。……」
親仁も、ちび〳〵と嘗めて居た。
「何、お前さん。所説つたつて、くだらない事なんて。いづれ其處等の小
屋掛芝居でございませうが、何とか云ふ俳優のしました、道行の其のな、
忠兵衛の親仁にそつくりだつて、婦の子が騒ぎますもんてね、……へへ、
騒いだ處で、爺が爺に肖たのぢや一向に榮えません。其でも思ひつき、と
申した處で、忠左衛門では茶飯屋には成りませんから、一つ姉様の方にい

たしましたよ。はい、ては、お訓染の名は、梅川て。」
「いゝ遊女に聞こえますね、聞いたばかりて、白いものが、恁う何となく
ちら〳〵しますぜ。」
と松が云つた。
「行燈だらう。」
「へい、」
「梅の花が散るやうぢやないか。」
「氷つた水道の上へですか。」
「ちら〳〵、ちり〳〵と其の花片へ、寒參詣の、あの、鈴の音が折撞るや
うだ。」
「寒いねえ。」
と肩を窄める。
「たてつけるさ〳〵、一杯赫と煽つた時は、其のちら〳〵が、ほつと成つ

て、薄紅梅に見えるけれども、凄い星が紫がゝつて、颯と褪せて暮く成つて、忽ち霜に醒めて了ふ。」

——懺悔々々——

——六根清淨——

「あゝ、滿々と最一つおくれ。……志かし、同じ場所へ行つた歸りに、今ふつと車が留つたらう。はつと思つて目が覺めると、此の茶飯屋に、其の人の名があるのは不思議ぢやないか。しかも臘燭を買はうと云ふんだ。以前、其の婦と別れ際に、あゝ、そりや、おでん屋だつけか、矢張り夜あかしの大道店へ、ぱつたりと車が留まつて、車夫が臘燭を買つたんだ。(細いのがありますわ。)

と後に居た其の婦が、紙入に手を掛けた。」

「旦那、旦那、串戲ぢやねえ。」

と松は大聲で言つた。

小彌太は吃驚して、

「惚話ぢやない。」

「否、薄氣味が惡いんでさあね。」

「もし、それは何處でございます、矢張り此土地で？」と親仁も氣に成つたか、きよろ〳〵眴す。

「いや、づゝと遠く、神田の明神の坂上だ。其の晩切、長の別れと成つたがね。」

「そして、其の方は何うしましたえ。」

「其が行方が知れないのさ。」

「處で搜しに來らしつたんだ。」

「搜すと云つても東京中、……いや、行方の知れないものは日本中か、山だか川だか谷の中だか分らない。が、たゞ其の婦の居た近所だから、同じ月を見るにしても、此の深川が可懷しい。

たゞし、それは此方の内證て、大事な品ものを托けるのに、……出格子へ雨宿りして、ふつと顔を見合はせるのが、例の……なんのつて、そんな奴を見立てた繪師も繪師だね。

それ、茫乎立つたわ、可かね。おしめて弱つたなんぞと馬鹿を云ふ……其の手に、風呂敷に包んだ奴をぶらさげて居たんぢやないか。

狙をつければ、鳶だつて攫ひます。」

と斷念めたやうな言語。

「ぢや、搔攫ひにお盗られなすつたんて？」

「否。」

「お遺失しなさいましたかね。」

「否……さあ、其からなんだよ。……」

七

時は、暮方の軒が沈んで、瓦は浮上つたやうに見えたのに、家並の屋根はづッくりと重く成つた……雨はすぐに留みさうもなかつたのであつた。

傘を持つて追つて來た、繪師の使を、拗氣にはぐらかした小彌太は、能樂界に名だゝる宿老、新海孫六兵衛の甥に當る。

其處に托かつた一包は、名門の三世五代、家に傳はる古今の神品。傳へ聞く、都より便船を以て下しゝ時、船とゝもに湖水に沈んで年經たのが、おのづから竹生島の御堂の縁に浮出てつとて、（龍神がへし。）と世に聞えたのを、宿縁によつて相傳した、銘を（浮草小町。）と云ふ、其の美女の、宛然生首の如き、なきざらの面である。

「何を大袈裟な。」

て、醉つたればものとも思はず、輕さは輕し。空辨當にぶらりと振つて、高足駄で、其路次を出た。が、面を打つて快いで濟まされるやうな雨ではないので、通りがゝり間近な處、低い軒に、切干大根を紅殼で染めたやう

な、くな〳〵の端緒をぶら下げた、暗い店を見着けて入つた。

「番傘を一本、古いので構はない。」

亭主が朦朧として仕事をして居て、

「歯入れはいたしますが、番傘の古着はございませんので、」

と希有な顔して、まじ〳〵と云つた。

「いや、新らしいのなら尚ほ結構。」

小彌太は、はじめから遠慮したのである。軒の端緒で縁があらうと思つたばかり。店の様子が新らしい傘など賣りさうにも見えなかつた。元來、ありあはせたから入つたものゝ、酔心地の此の場合、雨具を買ふに、煙草屋、と荒物屋を何ぞ撰ばむ、古寺だと尚ほ面白かつた。

處が案外、歯入屋にも小僧が居る。……片隅から、ちよろ〳〵と鼠の如く顯はれて、柱に攀上るやうにして、天井の傘をはづす音、ばさり、ごそり。雨はじと〳〵と降る。

「涸れて居ります事はお請合て。御覽下さいまし。……電燈が來ないな、電燈が來ないな。」

と叱言らしく小僧に云ひ〳〵、ふッ〳〵と膝を吹いたが、古下駄に赤めの入歯を、金鎚でコトンと敲く。

其の歯入を待つて、取つて歸らうとするのであらう、と小彌太は思つた。

……店から一坪土間を切つた、敷居の外に沫を除けて我は行む。

亭主は土間の向ふに、箱火鉢を置いて胡座。ト其の火鉢の縁に、お召の袖ぐるみ、肱を包むで袖口をひたりと合はせて、落膽弱つたやうに凭懸つて、胸を壓して、寂しく肩を落したなり、白々とある頸を斜ッかひに、横向の、はら〳〵と亂れた櫛卷の眞うしろ。框に腰を掛けた、しなやかな裳は、正面に此方へ見せたが、裏は曇つた黄昏の片褄を引上げた。雨を潜つて來たらしい、しな〳〵と、細く搦んだ緋縮緬。雪の素足に淺黄の緒、雪駄か知らず、ぐッちよりと濡れたのを、片足、膝で組むで、爪先を上へ、

輕く重ねるやうにして居たのがある。

其の髪は濃し、若からう。

齒入を待つ……と見て取る目に、小彌太は、其の、(それしや)が猫板に突伏した時の、切なる、もの思はし氣な、曲つた、背筋、胸さきにも似ず、褄はづれ、捌いた裙の、心易くすら〳〵として、秋の水の流るゝ風情に、濡れた淺黄の其の端緒さへ目に着いたのに、月の眉の俤さへ少しも見えず。

たゞ艶々と黒髪の、動かば颯と丈に亂るゝが如きのみ。

八

買ひたての傘をみりゝと開くと、濁つた雲に手許が明るい。……黒かめ橋が、雨の中に煙を離れて、目には遠いが、つひ其處で。ガラ〳〵と電車が響く。人通りが繁く成る、と物足りない。……何か土地に離れるのが可惜い氣がしたので、小彌太は故と、空地のやうな入口の廣い、向ふすぼま

りに奥深く見える横町へ、逆に入つた。

唯、一廻りして、隅と思ひ掛けない處へ出た。

然まで道巾は狹くない。が兩側とも軒並の家は一軒も見えぬ。一町内押繞したかと思ふ。……何か大間屋らしいのゝ裏塀が、眞黒に見渡す限りづつと續く。其の中に、土藏がづしりと夾まつた。……一方は、折から鼠も居さうにない、寂とした大な物置。幾棟ともなく建連なつて、屋根を打つ雨の音の聞こえないのさへ、うら寂しい。地の長廊下を遙々と渡る心地で、火の見櫓を横にして、其の中を潜るかとも思つた。

雨はびしよ〳〵、びしよ〳〵と、土藏も小屋もわいだめのない、ものに區別のない世の中は、心細いまで同じ音で。

こゝへ入ると、ばつたりと穴へ落ちたか、と日が暮れたのである。

處々、雨の中へ、霧がかゝつた狀に見えるのは、汐のさした薄明りて、……其物置の背後は、心覺えに違はなければ、高橋通り、扇橋をかけて、

八幡の裏を、小名木川筋の流なのである。……

二ッ三ッと、物置の間に隙間のある、其處を通れば水が見えた。降續いたのに、又宵の雨。水溜に搗てゝ加へて、だぶ〳〵と汐がさす。底光りする濁つた水が、三日月も掛けず、柳の影を華奢な骸骨のやうに映しながら、びしやびしやと溢れかゝつて、其が、足駄まで陰に響く。

かと思ふと、眞暗に成る。……ト又前途へ其の水あかり。一筋毎に前なのが薄く成つて、果は森か、山か、何か突當りさうに、むら〳〵と濡曇つて、魔ものゝ如く虚空を遮る。……時雨に鐘があらば、其の中から聞こえやう。

ゆるく、沈んで、ごろ〳〵と行くは地車。……川向ふから遙に響けば、婆婆を離れて居るのではない。

物置、五ッ。……二度ばかり、其の水を見て過ぎた時、雨脚が又一時、ざつと頸筋へ降りかゝつたと思ふと、直き背後で、

「堀さん。」

と、小さな聲して呼びかけたものがある。一度で聞こえた。が、餘り思ひも附かないので、默つて歩行いた。

「堀さんぢやありませんか、違ひましたかねえ。」

と媚かしく、馴々しく、遠慮なげに云ふと、其の婦は、斜にやゝ退つた物置の方へ氣勢がして、殆ど肩を並べるまで近づいたらしかつた、時に、頻りに暗さがましたのである。

「は、」

應ずる聲は咽喉を引いて、婦に手繰らるゝやうで、出る足もはたと留まつたか、と思ふ。けれども對手が立留まりはしないから、一所に歩行いて居るらしい……

「堀です、私は。お前さんは？」と云つた。小彌太は繪師の女中に、半時の中に此處でめぐり合ふのか。ふと然うも思つたが。……

「しばらくですこと、まあ、」
「えゝ。」と茫乎、不意打に氣を抜かれた體に成つて、それでも、前刻の女中でないだけは、其のもの云ひで確に成ると……
「誰方、誰方、貴方は？」
「眞個に、しばらくでしたわねえ。」
と身に染みるほど傍へ、と思へば、はら〳〵と小彌太の手に雫が掛る、傘と傘が觸つたらしく、ばさりと當つて柄が重い。

九

傘が衝と離れて開いた。
「お可懷しい事、」
と云ふ。立留つて、熟と瞻めたらしく、其の時小彌太も、我知らず歩が留まつたのである。

「失禮ですがね、薩張お見外れ申して了つて、」
其の癖、見外れると云ふ姿さへ、目には留まらず、しつとり濡れた氣のするばかりで、我が片袖の黒白も分らぬ。
「然う……」と一寸言を切ると、降り亂れて、冷い風が、二人の間を、さら〳〵と拔けた。
「隨分ですわね。」
雨が寂しく中を繫いで、
「でも、貴方はお達者で、」
「何、一向詰らないんですよ……眞個に誰方です、實際失禮のやうだけれども。」
「全く、お分りなさいませんの。」
「まるで、見當が着かないねえ。」
と些と碎けて。……小彌太は然うした中にも、あれかこれか、と知つた

だけの婦に梭を投げて、幻の糸に、宵闇の面影を雨の綾に織る。
「御最ですわ、ぢや可うございます。」
「可かありません、聞かして下さい。」
「構はないんですよ。」
「否、聞かして下さい。一寸手懸りでも、でないと、」
「でないと、何うして？……」
「何うしてつて事もないけれども。」
「氣味が惡い？」
「何、詰らない、」と口てばかり。
「歩行きませうよ、貴方、寂しいわ。……あ、少し小降りに成りました。
でも、まあ、眞暗だこと。貴方、誰も見て居ないから、お傘の中へ、」
小彌太は婦の言ふこと毎に、我を忘れて一ッづゝ頸いた、ト心着いた時、
さつと云ふ……婦が傘をすぼめた音。

縞の羽織に、すら〳〵と衣摺れの手應へして、我が爪尖が仄白い。
びた〳〵と歩行き出す。
一寸無言の間に、小彌太は、前途に未だ消殘る。其の地を這つた水明り
が一筋、路を横に擴がつた、……其處を的に、顏を、姿を、と思つた。が、
いざふれ、それと窺ふと、物置の一ッ其の隙間が、水嵩高く、どんよりと、
雨も川も小さな湖ほどに見えた。其の水面に、人の無い、大きな船が茫と
浮んで、だぶん、空さまに舳が搖れた拍子に、川波がどつと搖れて、足駄
を掬つて、ざぶりと流れた。驚く途端に、顏容さへ、婦の片袖も何も見え
なく成つて。
「出水なんですか。」
と夢のやうな心で聞いた。
「否、潮時は何時も恁うなんですよ、それに降續きますから、」
「お宅は御近所、」

「あんな事を云つて、」
と微かに微笑んだらしいので。
「まあ、云つたつて可いでせう……此の邊に居るんですか。」
「えゝ、然うなの。」
「一體何處なんです、此處は？」
「まあ、――今日は何方へ行らしつて、」
と一層馴々しく媚かしい。
「何處つて當なしに散歩いたんだがね。」
「だつて深川なんでせう。」
「まさか、」
と云つて笑つたが、
「そりや私だつて知つてるけれど、妙な處へ醉興に紛込むで、まるで見當が着かないんです。」

「あら、御存じぢやありませんか、大問屋の、あの、油藏の中だわね。」
小彌太は何故か、ぎよつとして、油の名に負ふ、其の地獄の道を辿るのかと思つたのである。

＋

今のを聞くと、……折から小雨に成つた、それも、ぐしよ濡れの路も、藏、物置から滲出した一面の油のやうで、歩行くのに、つるりと出さうで、妙に又足駄の浮足。踏み心の覺束なさ。暗さも暗い。それさへ艶をもつて、べつたりと雲から油の垂るゝが如し。
小彌太は縋りたく成つた、――手探りに密と探すと、袂の端も指に觸らぬ。離れて歩行けば、ひたひたと附添つて、自分の足許が亂れて辿々しいのかとも思ふが、別に濡れて行く足音が、近々と裳に搦むまで入違ひに交つて聞こえる。

身體は兎に角、いつか心では、婦の姿を、暗夜に花あるたよりにした。
が、其の、心も宙に、餘り便なさゝうなのを悟つた樣子で、
「些とも、貴方、御心配なさいますやうな。をかしな場所ではありません
わ。……つひ、何時も此處をお通りなすつたぢやありませんか。」
「何時？……何時ね。」
「花の霞む春の日に、」
「花の霞む春の日に？……」
「えゝ、直き其處の辨天樣へお參詣なすつて、お歸りがけに、此の裏路を
通つたぢやありませんか、私よく見て知つて居ますわ……」
と、何故か沈んだ言であつた。
「でもね、晝間でしたから、うつかり聲なんぞ掛けては、お惡からうと思
つて、默つて、密とお見送り申しましたの。些ともお變りなさらないわね
え、羨しいわ。」

「……」
「まだ、お分りなさらないの、何うしたの？」
と姉が弟に云ふやうに、
「あの、取着きの土藏の前に、川岸の柳も霞むだ中に、お納戸色の石持の
絞着を着て、白い脚袢を穿いた、きれいな坊さんの、目の見えぬ、色の白
い飴屋さんが一人。ね、小兒を對手に、悄然立つて居た……貴方がたは餘
りお見掛けなさらない樣子でしたから、そりや屹と覺えて居らつしやるよ
……分つたでせう、それ、」
と云つたが、腰を撓めて、背後向きに指す氣勢で、
「彼處よ、貴方、いま入らつしつた、曲角の。」
小彌太も引込まれて、振返つた。唯見ると、婦の聲に色ある狀に、突當
りの長廊下、灯のない繪襖の黑いやうな中に、青く、色白く、其の飴屋の
幻影。

と同時に、颯と、雨に墨流しの彩して、瀧縞お召も、淺黄の端緒も、目に透通るまで歴然と、其の櫛卷の毛筋も且つ油に艶やかに瞳に映つた。

が、顔はあはれ、白い頸を、肩で捻ぢるばかり邪見に引背けた。

「ぢや、御近所の方だね。」

「分つて？貴方？」

「齒入屋に居なすつたんだ……」

「長い間、ねえ、」

「えゝ？」

「あの裏に居ましたわ、三年越、」

「三年越、」

「もうね、それは情ない病氣で煩らひ通して、見る影もないんです。」

と背けた顔を俯向けて、眉も蔽ふ、と隱しながら、肩を抱くやうに頬へ片袖、胸で撓めた腕のしなひに、袖口の指の白さを、幽かに彩る緋縮緬、

片手に提げて男を除けた、傘の紙の蝶々が、ちら〳〵と、素足を誘ふて路を移る。

十一

「て、何、今ぢや病氣は可いんですか。」

と對手が凋んだ、わすれ草に、露を置くやうに優しく聞いたが、葉末に取留めて見るばかりも、其の花の名は分らぬのであつた。

「えゝ、何ですか、自分にも分りません。……でも、貴方が御機嫌よくつて、私、眞個に嬉しいんですよ。」

「から、一向詰らないんだよ、役雜でね、相變らず……」

「お祖母さんは何うなさいました。」

もしや、と隅と心着きさうだつたのが、此で又悉無に成つた。小彌太が其の祖母の事を心掛けらるゝのに恁うした婦の心當りは些ともない。雖然

聞くとゝもに可懷さが身に染みて、前の世の從姉妹かと思ふ。

「最う五年前に亡くなりました。」

「まあ、ねえ、そうや、貴方お寂しいでせうねえ……そして叔父さんは？」

呀！駿河臺まで知つて居る。

「幸兵衛は相變らず……叱言ばかり云つて居ら、」

と言ふ事は投遣りながら、這の孫六の噂をされた時、さすがに心着いた浮草小町は、確に預つて胸にあつた。それは雨降りの荷に成るため、包んだなりで、風呂敷の端を帶に結んで、ぶら〳〵と提げては居たが。

「それでも此の頃は、前のやうに御酒もおいしくめしあがらないで、澤山お元氣ぢやないさうですね、不可ませんねえ。」

「何うして御存じだい。」

「蔭ながら……あの……風の便りに……」

「失禮だけれど、」

と聲までが改つて、

「誰方です。」

前に又一筋、水明りが遙に映す。……板塀の影も筏のやうな、其處も物置の隙間であらう。

「可、んですよ、」

「可かあゝりません！何うも樣子が見忘れては濟まない方だけれども、つひ思出せません。後生だから、あやまるから、聞かしてくれませんか、一寸誰方だね。」

「可厭さ、私は、」

「意氣の惡い事を言はないで、」と前の薄明りを手繰るやうに一歩二歩。

「顔を見せないんだもの、」

「見せても可い？」

「……」

「大變な顔だつたら何うなさいます。」と、はつと傘を開きながら、小彌太の袖から袂を離した。彌が上に顔を包むと氣取つたが、婦が翳した其の傘に、沫するまで篠を束ねて、ざんざと雨。――

……と語つた時、梅川の行燈に褪せて、小彌太の顔は白けて居た。

時に、引撲く如く、燗酒に手を掛けたが、握拳のまゝ擋と留まつて、

「其の以前……弗つり行かなく成つてから、半年あまり立つて、よそゞゝろに茶屋まで行つて、あの(喜の字。)の婆さんから――其の女は最う廓に居ない。出たのでも落籍されたのでもない、病氣のために、内證で證文を捲いた次第、養生とも寮とも言はず、親方が年季を投出すくらゐだから、大抵容體は察しても知れます――と話をされた事がある。

肺病かと聞くと、いや、不思議な病氣、身體が糸のやうに瘦せて、額が拔上つて、頰がげつそり。そして希有なことには、兩方の目の球が、ぷく

ぷくと膨れて、まつげぐるみ、瞼が赤く飜つて、ぷらりと出る。……胸も腹も動脛はたゞ波を打つばかり、わな〳〵わな〳〵十本の指がひとりでに震へる。」

と小彌太の指もぶる〳〵と震へる。

車夫が、食ひかけた茶飯を手に据え、茶碗に素直に箸を握つて、うつかりと成つたのが、蓮の飯のやうに見えた。

親仁は握拳を組んだなりて、ぐしや〳〵と蹲む。

十二

「矢張り、血の道が内肛したんだと言ふ――疝氣の蟲は目が三つて、酢の中を泳ぐ格だね……永代むかふの世間へ出ると、ポン引が附いて、日比谷へ案内をしやうと云ふ、大昔の新姐だもの。目の出張る疾があるものか……婆さん、何を云ふ、と思つたが、何しろ、其の婦の大病な事はよく知れ

たんだ。

けれどもね、人間淺間しい事には、眞實よりか外聞が先に立つて、秋の末に、籠から掃出された虫の殼を、掃溜の中へ行つて探さうとは思はない、たとひ其が鶴でもです。

茶屋でも敎へなければ、無理に行先を尋て廻らうともしないで居たが、年が經つほど、妙に以前を思出して、夢を見る毎に可懷しさが增るから、同じ的なしに歩行くのにも此の土地を、と其日もはつゝいたわけなんだから、思ひがけない婦に、今云つたやうに、話しかけられゝば、すぐに其から知ら、と思つても可い道理だ、まあ、云つて見れば。

けれども、齒入屋で見たのが先にあつたらう、あゝ見馳れない婦が、と思つた。……其の姿が附いて廻つて、……其實暗くつて見えないのに——何うしても、背、格合、衣服の色合、繍柄まで、其の婦らしいから、第一年紀が違う。……七年前と思ふほど、實際よりは餘程ふけて居やう、と考へ

るのに、水々と若いから。

てんに思ひも着かなかつた。

が、(大變な顏だつたら何うします。)——とそれ、婦が云つたね。」

「へい。」

「然うで、」

と二人は同音。

「氣にも爲ないで忘れて居た、あの、目球のぶら下る病氣と云ふのを、背骨を撲られるほど思出すと、

(あゝ、おいらんか。)と言はうとしたがね、世の中に、忘れた人を言當てるのに、又此のくらゐ、不躾な言葉つたらないんだぜ。

(變つたつて可いぢやないか、そりや年を取れば……おい、見せておくれよ。)

と大に甘つたるく成つて、九分まで、其だと氣がつくと、今まで見えて

居た歯入屋て見覺えの姿が弗つと消えたよ。

さあ、其のかはりに成る顔も形も、同時に茫として……自分の覺えにある姿が、寫眞のやうに空へは顯はれないと同じに見えなく成つた。

ふと、聲もしないから暗闇へ探りを入れたが、右の覺束ない足許て、婦に寄掛るやうにして歩行いて居たんだから、悠う成ると立竦みで、

（今は何うして居る、え？つた處で、餘計な事だらうね……まあ、何處に居るんだね……）

（あ、）

と急に……そんな暗闇て、名も知らぬ鳥が鳴くやうな聲だつた、思出した、と云つた風て、

（……私は來過ごしました。ぢや失禮しますわ、）

此の邊に世話でもされて居るんだらう、と半分拗ね氣て、

（あゝ、然うかい。）

（氣まづく思つちや可厭てすよ、直き其處が明るく成ります……人に見られては工合が悪うございますからね、隨分、貴方。）

（難有う。）

（ては……）

ざら〳〵と雨の音が、別れて行く傘をあと戻りに送り返すと思ふと、何處へ曲つたか、其切。

て、ぽかんと立つて居る自分ばかりが、薄ぼんやりと目に見えた。

丁ど、物置の間の處で、唯見れば深川は水ばかり。

忽ち、何だ、……山路に踏迷つたものが谿河を見着け出したやうに、物置の横を突切つた。……早く川岸へ出たくつて。こゝへ來て、急に、しどろに成る。ト足許を向ふへ、ぢやば〳〵と行く……背戸へ水が着いたのかと思つた……飛石が動いて歩行く。……

十三

「呀！此奴ば化けたんだ。」

不意の高調子、聞くものをぎよつとさせた。小彌太は齒が痛むやうに片頰を打つて、引傾りながら、苦笑して、

「……私は聲を出して獨で怒鳴つた、……眞個、今てこそ話せ、話すと馬鹿々々しく聞こえるだらうけれども、婦が急に居なくなつて、妙に氣が拔けて、胸が空洞で、水岸へ驅出す足許へ、ぢやばりと其の飛石のやうに動いて行くものを何だと思ふね。

手近な話は、割下水の堀井戸で、俎を辷らかして庖丁を落した。其奴を、井戸の上から、黑奴の皿屋敷と云ふ風に引釣したまゝ覗かせて、いま落した、汝を斬刻むための刄ものだが、拾つて出れば命を助ける、と云つて、ドブリと突込むと、ぶる〳〵と暗號をするらしく、細繩が一度堅く成つて、件の出刄庖丁を、人を呑んだ大な口へ、ぎくりと横咥えにして上つたと云ふ……因縁づきの黑首の長いもの、……鼈なんだよ。

蒼海漫々として、乙姫だと、簑龜と云ふ處を、深川で、遊女で、鼈とおいでなすつた。

小馬鹿にして居て面白い。

それ、一抔にさした汐と雨水で、物置の間までびちや〳〵と、一つに花道の浪幕だろう。蛤鍋屋のお職が驅落ちをする處が、……可い氣に成つて川から出て陸遊びをして居た奴が、私の驅出したのに驚いて遁げるのか、しめろ一番。

何のみち托りものを屆けに、飯りがけ叔父の内へ寄らねば成らない。

叔父と云へば例の如く、晩飯の膳の上へ、德利をづらり並べて、湯豆腐の箸休めに雲丹の横甞めと遣つて居やう。

處へ、情歸もなし、錢もなし、空腹て、女郎の幽靈……」

と二人を、慌てた目で左右に見て、

「ねえ、何年ぶりかで、其處で逢つて、暗かりて口を利いた、其切、仔細も素性も分らなく成つて了つたが、其の時はまさか然うとは思はなかつたけれども、日が經つと今ぢや何だか幽靈でゞもあつたやうで、話しても悚然とするがね、……私の話したゞけの樣子だ、君たちは何う思ふ。」

茶飯屋は、大道行火に嚙着いたなりて、

「世間押しごとは申されぬ、如何樣、然やうな事もございましよ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

「可厭だ、なんまいだ、氣が早いな。親仁さん、富岡門前の夜商人がお念佛を唱へちやはじまらねえぢやねえか。折角の茶めしが針に成つて、咽喉へは通らねえ。又熱痛て搔込むだ、いぢけねえで、つけてくんねえ。へい、それから、旦那、」

「まあ、幽靈よ。ね、空腹で幽靈に逢つた、……此の面で、（へい、今晩は、）

とか何とか云つて、其の、酒ぼてりの、赫と電氣の明い、叔父貴が前へ出たが可い。

圓髷の從姉が困つた顏で酌をして居る前て、上目で睨で、口を曲げて、」と小彌太は額を壓へて話す。

「天窓から、馬鹿野郎、とおいでなさる。

（其の、馬鹿野郎の深川土產。）

て、スポンと出します。

いや、串戲ぢやない。……因果が報つた難產の嬰兒が取着いた、と云ふ形に、此なる鼈が、膳のふちへ手を掛けて、ぬつと首を突張つて、湯どうふを、じろりと睨む。

と從姉が前掛の膝を立てゝ、細腰て、きやあと反る。……苦虫忽ち酒にむせる。二番手の鉢ものごしらへに臺所に控へた叔母御が、女中ぐるみ、重なつて慌てゝ出て來る。

遣る事だ！と瞬く間に謀反を起して、サンクに足駄てゞも壓へる智恵か。」

十四

「今で思ふと、何でも、心氣惑亂、氣も顚倒して居たらしい、……お十夜まゐりが、賽錢を拾ふ形で、殆ど這ふんだ。

眞俯向けに、其の鼈の、甲羅に仇光りが薄く射して、人魂の泳ぐやうな奴を、すぢり、もぢり、おつと、おつと〳〵、……ヤ、ヤ、畜生め。で、追廻はして、占めたと壓へた。逆にぐい、と齒向つた首を逃げて、慌てゝ、勘處をつかまへ直すと、水を離れて、鼈ぶらりと下る。

トさげて立つた。先づ可。と……此奴が傍で見ると恰も魅まれた形ぢやないか。處を當人大得意。

さて持參に及ぶのだがね、此から先電車のお世話に成るのに、龜井戸の歸途だと濟ました顏ぢや持てますまい。袂も變なり。其處で氣が着いたの

は帶に結えて居た風呂敷だ。箱には打紐が掛つて居るから、それなり附け直しても可、露出て持つたつて構はない。傘は何時の昔、何處へ投出したんだか。鼈の立廻りで行方知れず……でも、そんな事はお構ひなし。

でね、風呂敷を取らうとすると、一向他愛もなく飜然と空。驚いたの何のつたら、何うです。兵古帶が解けて下つたやうに幕ばかり。大事な御本尊の影も形も無からうぢやないか。

アッと云つて、聲を出して、嘘では無い、二三度ぐる〳〵と廻つた。薄明るいのは水ばかり、道も自分も眞暗です。

さあ、いまの婦に奪られたが、と思ふと……又ね、其の水の上へ、一面に雨上りの霧がかゝつて、向ふ土手を處々小さな浮島に見せて、空まで果しがないやうな。何處か、其の川の眞中あたりを、白いものがむく〳〵と持上げられて、其まはりへ、薄赤い沫がかゝる風に、岸の火影がさら〳〵と靄越しに映りながら、ふら〳〵と流れて行く。……

箱は何うした。

（あゝ。）

あれが綿に包んだ浮草小町だ、と突流された心地て、伸上つて、熟と見ると、泡のやうにむら〳〵と散つて分れる。……蘆の穂の散り殘つたので あらうと思へば、……又、まばらに、すく〳〵と斜に出て、鰻が眞直に生へた形に、枯蘆の莖が見える。

……驚どころかい。」

と小彌太は、忙しさうに吸かけの卷莨を拂きながら、

「死神が憑いたぞ、此は。……いまの白いのを、流れた面だなんぞと思つて、うつかり慌てゝ踏出さうものなら、すぐに、頭の上まで沈む、傘をさした先刻のが裳を倒にして緋縮緬て立つて居るんだ……

と急に手足でと震へたと思へ。

枯蘆も疎らに搖れる。

眉を撫てゝ、スッと鼻のさきを掠めるやうに、一角の牙かと思ふ、大な船の尖つた舳先が、つひ其處へ、霧を綻ばして、すらりと出た。

汐は高し、岸に立つてゝ見る、其の舷が、水を抽いて見上げるやうてね、霧に映つて、影が、それ、手を伸すと届きさうで、其の實どんよりとした川筋の眞中に浮いて、朦朧とある。城の壁かと思ふ。しろ〳〵と見えたのは、眞新しい五大力てす。

棹を使ふか、艫の、水を打つ音もない。

が、隅田さがりに高橋へ入つたと見えて、舳は小名木川筋をさして居る。其の船底から、水が湧いて、霧へふら〳〵と溢れたやうな、大な魚の背と思ふ、重く沈んだ、鉛のやうな小船が一艘、二艘、三艘、——一艘——二艘——三四艘……」

十五

「見る間に、小舟の數が增して、霧に浸んで七八艘にも成つたらう……宮を掛けないから、今しがたの雨に濡れしよびれた所爲か、皆、船の中にこびりついて、海鼠か古綿が乘つてる圖だつた。

が、漕ぐ、と云ふより、船は皆尾鰭で魚の泳ぐ形――水の底に都がある なら、鮒、鯰と云ふ長屋の連中。

此の眷屬を從へた風て、舳も、舷も矗乎と聳へて、鷹揚に位を見せて、汐を恁々と乘りしづめ、靄を拂つて靜に渡る……其の新しい五大力。

舳を後に、船の進む方へ背を向けて、雛が袖口を合はせたやうに肩を細く、すらとした半身が、舷の上に一人。何處ともない水光に、横顏の靄ながら、ほんのりと白く見えた、結上げた黑髮は品の可い圓髷かと思ふ……

汐の滿ちた川面一面、雨に展いて、……岸に立つたものゝ下駄を浸す。時に湖のやうな川筋に、絡つた人の姿は唯其一つ。……で、影の如く露はれた、嫺かしい、新造の五大力の、船神の姿かと見える。

（南無阿彌陀佛……）

また、（南無阿彌陀佛、）

向ふでも、（南無阿彌陀佛。）

鉛色の小船の中の、爺婆と云つたやうなが、つぶ〳〵と靄に泡を立てゝ、其の海鼠、古綿の形で唱へる。……

あゝ、眞似をしても可厭な心持だ。」

と小彌太は頭を振つて言つた。

「陰氣だね。」

「南無阿彌陀、」

とつひ引入られたさうて、茶飯屋も、むづ〳〵と唱へて、

「川施餓鬼でございませうて。晩方などは滅入つたもので。……供養に亡者が浮ぶ……と申す、其のもし、亡者が大川面へ浮出したやうに見えますので、惡くしますと、三途河の渡場を見たいな事がありますのでございま

すよ。」
「然うかも知れない……實に堪らなく薄氣味が惡かつた。
其處へね、千鳥が啼いたかと聞く、寂しい、可哀な、而して情の浸渡る
聲で、
（あら、あら、）
と水に響いた。
（あら、）と、うら悲しく、最一度聞こえたと思ふと……舳先に居た、其の
姿が、陽炎の縺れるやうに、舷へ掛けて、背も袖も亂れてさ、水を倒に覗
いたんです。
（あゝ、私の手が、あれ私の手が、取れて落ちたよ……まあ、まあ、をか
しい、はゝはゝ、）
と笑ふんだ。」
「はあ、」と親仁は呼吸を引いた。

「あつと、見て居て思ふとね、
（おゝ、左の手も……あれ、あれえ……）
と身震をした樣子て、
（足が、……足が、まあ、左の脚も、取れちやつた。……おや變だ、水に
浮いて、水に浮いて、）
（南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛）
と唱へるのが、其のね、婦人が聲を立てると同時に、一調子高々と成る、
一言毎に張上げる、脈を打つて嵩にかゝる、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、
と、うら少い娘らしい念佛も交つた。
其の中にも、勘走つて、小兒の唱へるのが、そりや凄かつたせ、爺さん、」
と小彌太は少時唇を結んで居たが、
「消えるものか、紛れるもんか、婦人の其の白刄のやうに透る聲が。
（あら、お乳も二つ、あら、あら、流れて行く、別々に、身體かぼぐれる

よ、あれ、拾つて頂戴、取つて下さいなねえ。)
と舷に縋り着く。」

十六

「背後から、一人船の中で堅乎抱いた。島田に結つた若いのらしい、小肥りに肥つて居たつけ。
……其は何を云ふか低聲で聞こえなかつたが。
(何うしやう、何うしやう。えゝ！　御覽なね。それ其處へ、其處へ流れるのは私ぢやないか。手も足もお乳も、胸も……一寸、顏をお見よ、私てなくつて？……それ、あら、私だよ。何うせう、何うせう、何うせう、早く取らないでは！……)
と自分の身體を、自分飛込んで抱くつもりか、忙つて拂ふと、拂はれた、島田髷が傍へ刎ねられたと一所に、嬶々として、颯と長く倒に舷にかゝつ

たのを、や、落ちたと見ると、脫棄てたらしいコートなんだ。
唯二ッに分れて、其の婦の姿が、すつと五大力に立つたがね。
俄然として、笑ふ聲で、
(ほゝほ、お月樣だつて、落こちるぢやないか。)
と空を仰ぐ……眉のあたりへ、颯と蒼白い影が射した。
髮の黑いのが光るやうて、鼈甲の櫛が照々する……
墨のやうな、紋着の羽織が細りと靡いて、投遣りな褄は、船板塀に山茶花が薄く咲く……
手首の眞白なのもすつきり見える。
あゝ、船の中空に、蒔繪を研出したやうな月が……と見れば、居まはりの藏、物置も、濡色が黑く颯と照つて、ばら〳〵とある枯柳も、其處此處にすら〳〵光る。そして、土手を、ちらりと小提灯。
屋根と屋根とかさなり掛つて、星を鏤めた蒼空遙に、靄を破る鐵の天の

杜かと見る工場の煙突さへ、月の面へはつと吐く……短かな煙の白いのが、船の婦の立姿に、恰も白粉の刷毛に見えた。

（だまされたやうなお天氣ぢやの。）

（時雨は恁うでござりますよ。）

と直き足許の岸を、小船の中で曉舌つて通つた。

フトそれに、私は氣を取られたものらしい。成程、銀の月が、と紺青に半輪の象嵌したのを、裏透くばかり視めるうちに、五大力は艫を見せた。

婦人は又舷に俯向いて、熟と水を見て居た。

が、むら〳〵と大勢取卷いた影がある。

棹を取つたは、三人で。

さあ、其からの早い事。それ、あれと見る内に、早や、遙かに、小さい、眞前の小船近くへ。

其處に橋があると見た。欄干から煙つて、朦として、むら〳〵と又一面

の靄に成る、と寂莫する。

か、しないのに、ざあ——と、まだ人には降らぬ、中空の雨の音。

忽ち、どしや降。

人間、生命あるばかり。

黑江町で、別に私を待つて居て、水伊乃にも成らなかつた電車に驅込む、と、乘合がじろ〳〵見やがる、ぐつちよりてす。

籠の土産どころか、傘も疾にない。自棄に風呂敷は打棄つ了つた、手ぶらの足駄。

永代を通る時、別に飛込む氣も無しに電車から覗くと、……川蒸滊の煙が蒼く見えた、呀々とした月夜ぢやないか。

當分叔父の家へは寄着かなかつた。

日が經つてね、其面もかぶらない、這面を、苦虫の前へ持つて行くとね。

（流すな、……馬鹿野郎、差當り一寸困るから。）

と手酌で、ぐびり〳〵。

誰も居ない處で、口を曲げて、然う言つたのは、曲げた、ね、私が曲げた。質へ入れた、と云ふ推量なんです。

冬木町の繪師からは、既に私に托けて返した、と沙汰を爲たらう……」

十七

「他人ぢやない、まげてが嫡々の甥どので、當家重代の小町の面だ。一寸紙入の底へ入れて、水引の掛つた……叔母へ內證の謝儀づゝみ五つや七ッては、間に合はないと思つたらしい。

一度も、義理合のお葬式に羽織袴を借りた奴を、早速返しに持つて行くと、馬鹿野郎、叔父に借りた羽織袴を、疊んで無事に持つて來る、べらぼうがあるものか。葬式は何處だ、何、谷中だ。なぜ歸途がけに、根岸邊の質の川へ沈めに掛けて、仲の町へ浮ばねえ。しらふで、生白い面をして、

へい、お袴を――當節の若いものは其だから話せねえ、と飲んでた機嫌でまくし掛けた事さへある。

それ、文句は言ひません。慈悲は擴大。工面が出來たら、叔父が自分でうけて遣らう。が、流すな……と此處で、掛けがへのない品だけに念を入れた。

――流すな――は弱つた！……

小町は浮草の根を絕えて、誘う水に、其の晩、疾うに流れて居る。

が、始末にをへない。其のまんま、しり込みをして、でも、熟と叔父の顏を見返つて、潛門をちよろりと遁げた切、鼬の小彌太と渾名を取る。ね、非常に御不沙汰をいたしました。」

と大分醉が出た。談話の川端の時雨のあたり、立續けに煽つたから。

ふらりとして、

「何うも、相濟みません。

けれども、芝居ぢやあるまいし、茶入や、一軸が紛失したつて、日本……いや、深川中武者修行をするにや當るまい。道中で情婦でも出來ると云ふなら知らぬ事。第一、十萬石の小倉の色紙、とか何とかなら、苦勞するにも張合はあるが、能役者の重代、出目作と來た日には臺辭に成らない。

と高を括つた。あの繪師に貸すくらゐなら、私にや下されても可いわけだと。

後で聞くと大變です。既にそれだけ大切なものを借りて置いて、返すと云ふのに、たとひ親身にもしろ、物干から揮がぶら下つたやうに、日向の深川へ、足駄ばきで、山の手から出て來たものを、出あいがしらに捉まへて、托ける奴も呑氣過ぎると怨んだら——何うです、當人の繪師が其の面を持つて出ると、思ひがけない故障があつたり、急に大雨が降つたり、一度なんぞは、飛乘らうとして電車で怪我をして引返した事もあるさうだ。

ぢや、言つてくれるが可いぢやないか。

と言ふ。それも、恁う成らないうちは、聞いたつて、眞個にしたか何うかね、すべて心得違ひをして居ましたよ。

幕があくよ　さあ……私の佗住居へ、車夫が手紙を以つて驅着けた。お家流さね……御殿女中、若葉どのゝお古だから。で、叔母前の、はしり書で、叔父さんが病氣ゆえ一寸……とある。

面よりか、實は此の方が面くらつた。

醫師が、車で歸る所へ飛込んだんです。

恁う見えて、慌てもんだからね。がたんびしんと驅上つて、せい〳〵云つて茶の間へ入ると、向ふの臺所口から、人を凡て安直に扱ひやがる、長年ものゝお三どのが、部厚な顏を柱がくしで、頰を搖つてニヤ〳〵と、此方の慌しいのを見て笑ふ。

先づ、生命に別條はなささうだ、と此で一息吐いたつけ。叔母が長火鉢の前に、ぐつたりと俯向いて、まはり近所のが二三人、來合はせて居た處。

其の日、能樂堂で、三番目の熊野を勸めて、人が車を、車を、と云ふものを、何が、で老人、天氣は可。最も杖の味はまだ知らない、薄目を仰向けに、夕日で醉うた顏をして、日和下駄をかた〳〵。信玄袋を提げて、中古な、袖外套で一人で歸つた。九段坂の下口で、横倒れに……ステンとまいつた、と云ふんだね。」

茶飯屋ぎよつとする、此も老たり。

「はれ、其は、お危い。」

十八

「何でも横倒れに成つたらしい。左の頰邊から額を擦剝いて、片腕へ怪我をした。……車で歸つて來た時は半面血だらけで、家中が氣を打つたが、醫師が來て手當てをすると、然したる事でもないと言ふ。……怪我は案ずるには及ばないが、何しろ年配だし、一寸でも人事不省に成つたんだから、氣を着けなければならないと注意をしたッて。

叔父は、其の轉んだ當座、氣が遠く成つたらしい。

車もね、自分で雇つたのでは勿論ない。坂上の交番だらう、巡査も驅着けて、しんせつに世話をされたが、それよりか、矢張り手車で通りすがりに、綺麗な少い女が、飛下りて、抱起して、身體を擦つて、其が車を拵えてくれたんださうでね、

（天人が天降つて、お助け下された。）と負惜みのやうに洒落らしく叔父が言ふのも、血みどろの、泥まぶれ。身體がぶる〳〵と震へて、上框を這ふのだから、譫言に聞こえて心細い。

熱もある。

て、氷嚢の手當をして、今は昏々して眠つて居る。

と云ふ處へ、私が飛込んだんだ。

家は駿河臺だのに、――錦町だ、今川小路だと仰有るんで、方々まごつ

きました。お大事に、と送つて來た辻車の若衆も憂慮さうに案じて歸る。

……町處の分別が亂れるやうでは、と叔母御は涙ぐんで居るんです。無理はないね。

妙に、する〳〵と、九段上が砥の上へ油を敷いたやうで、足が、辷つて、前へ出て、留めても留まらぬ。變だ、と思ふ……あの、坂の下口が、雲を踏外した心地で、あつとも言はず打倒れた。——怪我をしたのは自分の所爲ぢやないぞ、——と豫て一人歩行きは危ない、危ない、と老人扱ひにされるのを嫌つて、故と日和下駄をからつかせて負けない氣の我が折れて、小兒が言譯をするやうな愚痴らしい事を、べそを搔き〳〵。

婆々どの心配を掛けて濟まん、と言ふ心持の、あの、氣の折れ方が情ない。身體が弱つた證だつて、叔母御の言ふのも道理です。

が、そんな口を利いたくらゐ、歸つた當座は、一時、正氣のやうだつけ。少時して、又茫と成つて寐た。……其のまんま、すや〳〵と鼾を搔いて居

るんださうだ。

胸どき〳〵で、其の容體を聞く處へ、五人七人、袴、羽織をさら〳〵と遣つて、名々〳〵羽二重の紋着の、紋はどは、年紀の違はぬ……男振も揃つた血氣盛り。いづれも淺草藏前の大師匠、取立てゞ賣出し花形のお役者連が、粒を揃へて見舞に來た、皆能樂堂を濟ました歸りで。

（飛だ事ですね、）

（御容體は如何ですか。）と言ふ。

續いて、どや〳〵と弟子筋の紳士連、婦人客。て、八疊充滿綺羅星さ。

（驚きました……先生は？）

（先生は、）と訊く。

玄關上り口は、コートと外套で造りものゝ山の如し。

其の蔭に、遙か末座へさがつて、遠慮らしく小さく座つた、無地ものゝ綿入に、黑地の羽織で、服裝も薄ぼけて、寒さうなが、肩つき胸つきの端

然とした、爺様が一人。釣船矢右衛門と言ふんです、八十五に成る、御狂言が、鼠色の毛糸の襟巻を取つて、しやんと、手を支いて、

（えい、御新造、）

と叔母を呼んで、おつとりとした面長な顔を上げて、

（さて、若旦那は、何うなされた。）と言つた。……大酒の上へ、よい〳〵染みて、手足が震へて、とぼとぼ歩行く。既に、九段坂で轉んで昇込まれて、人事不省と云ふ叔父貴を呼んで――若旦那――此の人にばかりは何時も聞く言だけれども、此時は一言で胸が迫つた、私は思はず泣いたんだ。」

十九

「……私は蒼く成つたよ。

（面は何うした？……）

怪我の時、入齒も損じた、もく〳〵と窪んだ頬で、唇をゆがめて精を張つても漸つと聞取れる呂律の怪しいのが、切れ〳〵に、仰向けに寢たまゝ然う云つて、熟と私を見た目を、懶さうに最う塞ぐと、困つた野郎が心掛りな恩愛の涙が瞼を流れる。……水涕と一所でね。

身に染めば、それも尊い。はろ〳〵と露が溢れるやうです。

それを白い手で從姉が拭くんだ、頬から鼻の下を。其處へ、縱横に血の染んだ擦剝傷が傷々しく見えるぢやないか。

此がね、怪我をした後、二三日經つて、其でも正氣には成つた處へ、見舞に顔を見せた私に向つてはじめて云つた言だつた。

（面は何うしたよ。）

最も傍に居たのは其の從姉ばかり。

……氷嚢は除けて居た。高枕で、搔卷を深々と掛けて、顔ばかり出した、其の色艶も沈んだ叔父の顔が、活きた名作の面のやうに見えたと思ふと、腸へヒヤ〳〵と染みて、はじめて、（浮草小町。）の尊さが分つた。あゝ、其

面も目を開かう、目を塞がう、瞼も濡らさう、口も利くだらうと、……ぎり〳〵頭を突刺される。

言語同斷、深川で流して居ます。

が、口へは出ない。又出されるわけでない。

と少時して

（紙入を、紙入を、）

て、從姉に用簞笥から出させてね、

（足りなくば、縫と相談せい。）

と言ひながら、薄笑を片頰に、其の疵の痕を動かして、

（一生懸命の、あの、（浮草。）は俺の情婦よ。）

と向ふむきに成つたもんです。

從姉と顏を見合はせた。

（質、質になんぞ入れるものか、すぐに、）と云つて、天井から飛び出しさ

うに、が裾から消えたやうに、最う堪らなく成つて逝げて出た。

其の三日目が、今夜の此、此の私だよ。方がへしの附かない身體と思へ。

自分の影法師を落したやうに、此の二三日ふら〳〵と成つて、足も上の空で川筋をふらつくがね。顚轉した所爲と見える……悠うして思ふと、餘り取留めのない事だげれども、幽靈だか、妾だか、あの晩逢つた遊女が以前居た、はじめて私が顏を見た洲崎の樓のね、婦の部屋の床の柱に、ふと其の浮草の面が正面を向いて、薄蒼く、俯目で掛つて居さうて我慢が出來ない。

何と馬鹿な！

臺灣から歸つたやうな顏をして、お互に年も忘れた、（喜の字。）の婆さんの内へ飛込んで、さて久しぶりて提灯を點けたがね。

昔の藝者だ、半纏を斜つかいに、突袖て、ト出た處は野暮では無い。雖然、客が此の方て、其の婆さんだから、緣日商人が歸りがけに道連れに成

つた辻占賣と云ふ形です。

大時計の霜を高く見て、廣い階子段を上つた。と取着きの八角火鉢へ膝を支いたうちも、尻はむづ〳〵する。

（遊女に註文があるぜ。）

（あゝ、〳〵、よく仰有つた、感心に捌けましたねえ。）

と仰向いて、覗いて提灯を、フッと消して、莞爾、婆さんは顔を見た。」

二十

「此方は其處どころぢやない。

（註文は、）

と云ふと、遣手部屋の前を廊下すた〳〵て、ばらりと並んだ重ね草履に突、掛りさうな權幕、

（此の部屋の遊女を買はしておくれ。）と障子の前に立つたのが、昔馴染の部屋なんだ。

直ぐにも入つて、上の間の床柱を、と思ふけれど、さすがに其までは遠慮して控へたつけ。

此方を向いて、肩を落して、片手懷に半纏の袖を投げて、婆さんは遣手部屋の前に立つて居る。

莞爾々々して、

（さあ〳〵、丁度可ざんす、すぐお座敷へ。）

（御免なさいよ。）

で、開けて入ると、ちらりと見えた。紺と白だと思ふ、あらい棒縞の寢ン寢子を着て、長火鉢の正面に頰杖で居たつけが、島田を見せて、ト長羅宇をキッと支いて、背筋を捻ぢるやうに向ふを向いた……をチラリと見て、座敷て、突如床柱を視めたが、あらう筈なし、と云ふうちに何にも無い。

はつ。」

と嘆息して、俯向いて、

「却つて、前の遊女が、朝寒のしら〳〵あけに、麻の葉絞りの白地の浴衣の裾を敷いて、逹手巻の寢亂姿で、早や輪の小さく成つた、朝顔の花を蔓ながら、其處の掛花活へ、やせぎすな姿を搦むやうにして活けて居て、立つて〻、振返つて、

（目をお覺しよ、）

と言つたのを、目に見るばかり思出す。

杯の間に聞くと、其の遊女は最う亡く成つたと言ふ。然も……」

親仁は蹞つたなり、ぶる〳〵と頭を振つて、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

「私も、はッと思つて、思はず口へ出た。

（矢張り何時か聞いた病氣でかい？）

（え〻、も、そりや病氣が原因には違ひありませんが……然うやつてね、

兩眼ぶら下つたのを苦に病んで、可哀相に身を投げてさ。）

と（喜の字。）が言ふんだ。

（え〻）とも聲に出やうぢやないか。何處で、と聞くと、さぶりは、いづれ大川であらうけれど、死骸の上りましたのはづ〻と下て、八幡樣のうちの渡場の處だつて……」

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

「婆さんが、私の顏色を憂慮つて、

（否、おいらんには內證のものがござんした。しかしね、顏がそんなに成つたので、其の人には棄てられます……親と云つてもね、九尺二間に割世帶の中へ引取られて居ましたが、一頃、病氣が中なはりをした時分、宅へ毎日のやうに精々來て、貴方に逢はせろ〳〵つて申します。餘り、いぢらしいから、一層お逢はせ申さうか、と私も思つて、（ぢや逢はせやうかい。）と云や、（否、治りましてから、こんな顏をして、まあ私。）ッて、上被の兀

げた紺の筒服の腰切なのに、お召の前掛ばかり綺麗なのを占めて居て、其の前掛で顔を隠すかと思ふと、――小彌太さん、おいらんは居ない〳〵、ばあ、――……とニヤリと出します。其の目が二ッ蝸牛のやうにぶらりとして居ませう。最も、氣もをかしかつたものと見えます。そんなこんなで取のぼせて、つひねえ、お前さん。

何しろ、其の、――ばあ――

おゝ、寒い。」

と小彌太はぶる〳〵と胴を震はす。

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、」

「……些とも醉はない。が、引掛け〳〵飲むほどに、耳許で打つ小皷の太皷を、責皷のやうに聞いて、少時正體がなくなつた。」

（目をお覺しよ。）

フト判然。はつと思つて、起返つた其は、然も今夜、かれにこれ、……

前刻……一時過ぎ……」

二十一

「喜の字の婆さんは、……私の樣字が心配だつたものと見える。醉倒れた間も傍に居て、藝者を對手に爪彈で新内の道行なんか聞かして居たつけ。

ぎよつとするまで、其の――目をお覺しよ――の聲で、刻起きると、未練らしいが又視めた、床柱に何の影の無いにつけても、最うそんな處には居堪ちない。

と云つて、當分、飛行機の中へでも投上げなけりや、納りの着かない身體だ。まゝよ……途中で車が轉覆つて、大川へでも飛込め、とすぐに――首尾だとさへ一言云へば、婆さんは昔から何とも云はない――歸り仕度に、長火鉢の前へ立膝で寄ると、婦だ。

例の向ふむきのまゝで、一服吸つけて肩なぞへにづゝと出した、トンと

拂いて、然やうなら、と廊下へ出た。ぱた〳〵と送つたが、何と、階子段を下りるにも、矢張り顔を背けて居やう。

此が、同じ形で、式臺に、草履を高く、部屋着の小紋の紋着で、すつくりと立つたのを、――茶屋へも歸らず、すぐに車をつけてもらつた――蹴込の上で、も一度見た。

が、ふと何だ。……それまでは、狂人だと思つたらう、其で顔を見せないのだと極めて居たのに……あゝ、あの、あの顔が浮草の面なのぢやないかと思つた。

（あ、）と留めて下りやうとした時さ。

（若い衆、お氣をつけ申しな……頼んだよ。）

と婆さんが云つたので、其れなりに……氷を破るやうに門を出た、――までは覺えて居る。が、此處へ來て、不意に留まつた。

がくり、と成つて、氣が着いた、前刻もです。

（目をお覺しよ。）

と宙で聞こえたと思ふ。……行燈の薄白いのが、途端に面のやうに見えたくらゐ、……梅川と云ふ名ぢやないか。

（おいらん、返しとくれよ、返しとくれよ。）

と何爲か昔のやうに駄々を捏ねて見たく成つてね、濟まないけれども、……爺さん……其の婦を前に置いた氣に成つて、頼むやうに、强情るやうに、縋るやうに曉舌つたよ、つひ。

品ものが（面）だけに、串戲らしく聞こえやうけれども、眞個にこんなのが、面くらつたと云ふんだらうね。

其處らの棟の鬼瓦でも、霜を被つて白けりや、嚙りつきたいほどなんだ。」

と戲らしく言ひながら、得堪へぬ狀してふと外を覗いた。小彌太の夢のやうな顔は、霜に更けて、行燈と二つ白い。

ト熟と的所なしに四邊を眺す……瞳は酒に朦朧とするらしかつた、が、

不意に縁臺を離れて立つ、と二ッ三ッ蹌踉いて、慌しげに、
「茶飯屋、」
と聲高に呼掛けた。
「面は、面は……あの、行燈の中にありやしないか。」
園の布を、小彌太は引絞つて出やうとする。
一方から、火鉢に蹲つて居た親仁が、むつくと出て、ひよこ〳〵と廻り狀に、屋臺の前なる、其の梅川の行燈を覗き込むや、フッと吹く……と、ぽッと車の泥障に映つて消える。
小彌太の衝と出る端を、其のまゝ壓戻す體に、園の中へ、逆に戻つて、
「何か、角長な人魂に見えて、尙ほお心持が變になります。早や、何事も迷ひの種でございます。……先づ〳〵、お落着きなさつて、凡て御分別は、夜があけてから、お太陽樣と又、御相談が可うございますよ。」
と染々言つた。

つく〴〵視めて、
「眞個、貴方樣、何うかなされてゝございます、お鎭りなさりまし。」

二十二

小彌太は腕を拱いたが、微笑んで且つ頷いたのである。
「……成程、分別はお太陽樣と相談か。あゝ、其の氣で先づ生延びるかな……爺さん、何だが樣子が、お前さんは、あの、行燈の名の人と、引かゝりかと思ふ、そんな氣がして成らないよ。」
「えへゝ、そんな事も、矢張りお太陽樣に照らしてから御覽じるが可うございます……」
「あゝ、分つた。何だか醉切れない酒が、又腹の底から、きつぱりと醒めた。今の言で、夜があけたやうだ。いや、日の出が待遠い氣に成つた。御異見實に難有い。が、察しておくれ。……此ばつかりが氣に成るから、恁

う言ふ中にも、それ、然うやつたお前さんの顔も、矢張、一個の、ものを言ふ、活きた面に見えてならない。」

と瞻られて、親爺は、もそ〳〵と兩手で額から鼻柱を引擦つて押撫てる。

小彌太は正氣づいたらしく、はじめて笑つて、

「睡さうだね、いや、濟まん事をした。……おい、若い衆、……にも氣の毒だ。」

と言ふ。車夫は、空にした、茶飯の茶碗を、ト巾着附に腰の邊で。くるりと向ふむきに、其處が板塀の小溝越に、足を投げて、突張りながら、殺さば殺せ、覺悟の體。首を長く、がくりと成つて、前刻から鼾を搔く。其の響きて、茶碗に投げた竹箸が、魔の魅した狐狗狸と云ふ形で、ひよい〳〵。茶飯屋が肩をたゝいて、

「串戲ではない、これ、若い衆。」

「おッ、」と云ふと、小溝へ突込まれたやうに驚いて目を開いた。が、緣臺

の腰を辷らし、ずるりと溝石に膝を支いて、慌しく、

「辨天、辨天、辨天、」と早口で、上調子に突走らす。

さては寢惚けた、と親爺、我が顏を指でさし、

「辨天町ぢやない、仕事先だよ、若衆何うしたものだね。」

「は、おや〳〵此處か。私あ最う旦那を乘せて曳出したつもりだつけ。」

「むゝ、の、最う出掛けるとおつしやるんだ。」

「氣の毒たね。」と小彌太は外套の襟を立てる。

「えゝ、あゝ、驚いた。何ね、爺さん、辨天だつて廓の事を云つたんぢやない、辨天樣の事なんだ。」と又きよとつく。

「夢を見なさつたか。」

「ゆめかね、はあ、それにしても、まざ〳〵と、あれ、直き其處だ。此處を出て、つひ、お不動樣の一寸手前まで驅けたと思ふと、寒參詣が羽を鳴らして、お前、宙を飛ぶ五人八人、九人一組。ちり、ちりゝんと、あれ、

それ、」
と伸上つて、
「あの音だ。が、路の兩方へ、ばら〳〵と散つて、蹲んで、土下座をする徒もあつてね。……辨天樣がお通りだ、お通りだ――ッてひそ〳〵言はあ。……やあ、路を切つちや成るめえと、ぐいと揖棒を壓へた、と思つた拍子に、お前が肩をたゝいたぜ。夢だとは知らねえから、風説のな、それ、」
「おう、」と合點。
て、土地子は頷き合ふ。
「お通りつて、誰方だね。」
「もし、高い聲では勿體ならうございますが、冬木の辨天樣でございます。眞夜中には、其の、時たま、此の邊まで御歩行なされます事がございますので、」
「あの御堂の？」

「へい……喃、苦い衆。」
「そりや、土地て知らねえものはねえんてす。」
言ふ間もあらせず。
ちり〳〵ちりん、りん、と上下に音が亂れて、霰が鳴るか、と鈴が響く
や、ひた〳〵と上の空らしい、足音を潜めたのが、煙の影かと立掛つて、
ばら〳〵と二人つゝ、屋臺の兩方から、中へ潜つた。
「辨天樣のお通りよ……」
「拜め。」
「內證て、勿體ねえ。」
唯見ると、向ふ側の土塀にも、路を開いた寒參詣、白衣を透す星の數、
水垢離の玉散るばかり、明星恰も月に似たり。

二十三

夜も悠う更けると、晃めく星は灯よりも明るい。消した梅川が薄青く、紙も透通るばかりに成つて、寒參詣が手ン手に、袖へ、足許へ引着けて、呼吸を凝らして潜まり返つた、弓張提灯の白い影は、輝く明星に冴渡る、大路の霜よりも暗いのである。

からんと鳴つて、遠くから玉の近づくが如く響いたが、――地獄を遁げて星に徜徉ふ蘇返つた幽靈めく――寒參詣の俠どもを、路の兩側に蹲まらせて、前後遠く犬も鳴かぬ、冷たく白々とある地に、白銀の糸の響を傳へて、氣勢が近づく。

ト兩側の棟が沈んで、裳を掬つて、輿に參る。……其の上を渡るが如く、すら〳〵と大道店、此の梅川の前を、汐見橋の方へ、向つて行く時、親仁が控へる袖を拂つて、小彌太は其でも乘棄てた車を楯に、半ば氣怯れしながら密と覗く。

駒下駄が、つらりと照つた。

捌く褄に颯と燃えつゝ、炎の氷つた紅が靡くと、霜の色が淡く搖れかゝつて搔消すばかり、弱腰に帶の錦の雲も無いのに、裳は重いまで肩からすらりとした。

打見るも麗なる女性。

明星の空の簪や、一輪蒼くうしろ狀に、黒髪の艶に沈んで、頸を白く、……やゝ俯向けに、袖を引合はせして胸を抱いた、が行過ぎる端に、ふと見えた、其の面影。

「面……だ！」

と小彌太は呼吸が發奮んだ。……幽ながら、

「面だ。」

「やあ、旦那、」

「もし、」

と左右から留めるのを、爪立足に、空蟬の殼を脱ぐ如く、すつと拂つた。

不意に車が、リリンと、何に觸たか鳴出したので、思はず一度立淀んだやうだつたが、肩を聳かして横ざまに、衝と行燈を離れて出る。

すつ〳〵と、一所に、左右から入亂れ、寄合はせて、白衣の臺に弓張提灯の淺黄なすまで、星の下に重つた、寒參詣を背後にして、小彌太は唯一人其の女性の後へ。

女性も唯一人前へ進む。

胸を抱いて袖を合はせて、打傾いたまゝ、見返りもしないで行く。

忍寄つた間近に聞く、からんと響く駒下駄には、浮世に通ふ聲はしたが、氣高く飾つた明星の光は、斜めに挿したと見ゆるまで、其の黑髪に照據つて、そよとも觸らば鏘然として、地にも落つべく鬢に輝く。

小彌太は氣怯れのみせられたのである。

汐見橋が瑪瑙の白きが如く、女性を迎へて塵をも据えぬ。

が、渡らずに、ふいと川岸へ切れて、角家の低い軒の瓦斯燈に、胸はづ

れを幽かに映しながら、上から下りるやうに曲つて、霜の横町へ、すつと入る時、女性は身動きもしなかつたのである。

樟腦の中へ入つたやうに、木の新しい薫がする、暗い門は、矢狹間に似て、城の如き一帶の材木川岸。

深川の水の黑さよ。

但、底あかりが、對岸の屋並を射て、立續く藏、物置、霜に尖つた屋根と屋根は、鋭くペン尖で描いたる、星の住居のやうであつた。

姿が搖消えさうに思はれたので、つか〳〵と寄つて、小彌太は我を忘れて言つた。

「面だ！……面だ。」

「あら、見着かつた、」

と言つた聲は、また思ひがけず、婀娜に情を含んで、男に投げたもので

あつた。

二十四

小彌太が驚く間もなかつた。

「はア、」

と其の後を、女性は地の底まで沈む、失望したらしい歎息すると、袖なり肱を曲げて、立揃へた材木のすく〳〵と並んだ上へ、背向きに顔を隠して、トンと身體を投掛ける、其の音さへ、谺するまで、寂然して、而して名も知らぬ美しい鳥が、大木の幹に縋つた風情がある。

「あゝ、面だ……矢張り面だ。」と小彌太は近くへも寄り得ないで、呼吸を切つたが、呟いた。

「面ぢやありません、面ぢやないの。」

と其のまゝ、袖の中で云ふ。……其の袖を、しなやかに衝と擧げて、然うして顔を蔽ふと、亂れた振を透通つて、悚然する雪の膚。……扱帶のなりて、しどけない寢着の褄も亂れて居る。

小彌太は偶と差屈むて、其の足許に目を着けたが、夜の小路の響にも知れた……素足の霜に水を搦めた淺黄の端緒では、よもあるまいが、……裳が落ちて、隱れて見えぬ。

「失禮ですが、貴女、失禮ですが、」

「違ひます、」

と判然と云ふ。

「違ひませう、違ひませう……が、一寸伺ふんです、貴女はもしか、去年の暮、月夜に時雨の降つた時、油藏。」……と聲が戰く。

「否、否、」

と頭を振る、鬢が頸に搖れた。

「ぢや、あの、石置場の處を、五大力に乘つて、通つた事はありませんか。」

「否、面ぢやないの、此の美しいのは、此の美しいのは私の顔です。」

と、袖を拂ふと、音もなく、ストばつれた。小彌太は其の顏がそげたと思つた。……女性も亦、殆んど首が拔けたらしく、くな〳〵と成つて、萎へたる衣のみ崩るゝやうに、ばつたりと腰を落す、と丁ど横たはつて居た角二尺ばかりの材木に支えられて、褄を投遣りに扱帶で留まつた。

「面ではないのよ。私の顏なの。美しいでせう、ねえ、美しいでせう。」

と言ふ。左手に取つて、肩なそべに袖の筋柔かに、小彌太に向けて翳して見せた。……時に臘の如く色沈んで、空しき瞳を恍惚と、黛ばかりはんのり浮く、頰のあたり薄りと、玉の雫の血が通つて、死顏ながら莞爾した。白齒もちら〳〵と蘊大けた、得も言はれぬ唇に、濃い紅の紅の色が、霜に颯と薄く冴える、もの凄きまで美しい、知らぬ昔の小首を、女性が、其の衣紋も等閑な袖口開けて、面を取つて、差向けた時、手首白く、二の腔透いて伸びたれば、恰も白鷺の長き頸に、其の蒼褪めた美女の活きたる首を、みだれ髪で繋いで掛けたやうであつた。

見紛ふ方なき(浮草。)である。

されば、天の簪の、明星の如く、夜行く人の黑髮を照らすと見たのは、名工の鑿の光が、細工に籠つた燐火であつた。蒼い影は、時に、女性の鬢を辷つて、手にした面の其の黛を、どんより照らして、雲の如き下髮の描ける額を宙に映す。……

あはれ(萍。)の名に負ふよ。材木の影は筏を流して、小彌太の地につかず立つ足許も、水に漾ふ心地であつた。

も一つの顏は袖がくれ。

で、小彌太が又何か言はうとした時、仇氣なく、頭を掉つた。

「お乳のやうに、お乳のやうに、兩方の目の突出た、瞼のまくれて赤いのは、私ぢやない、私ぢやない。」

「え、」

「……居ない居ない、おいらんは居ない居ない、おはゝほゝ。」

何處で笑つたか、袖の中から、甲高な聲が水に響く……

二十五

其は、月岡霞、と云ふ人に知られた女優であつた。

叔父上よ……

「ふむ。」

と小庭の日當りを、障子に嵌めた硝子越に、茶の綿入羽織の背に受けたにも係らず、蔭に向いた目を眩しさうに半眼に閉ぢながら、

「ハイカラのお狂言師と云つた、當節流行のものだな。」

と世に疎い言を、弱つた聲して、掠れ〳〵に言ふ。老いたる孫六は、其ばかりか、見舞の人々をも件の小庭の彼方なる、茶の室つゞきの座敷に殘して、家にさへ疎く、大儀さうに置炬燵に膝を入れて、其でも、端然として、……膝に編毛布を捲きながら、繃帶の手を胸の處へ、迷つた體にトボ

ンと置つゝ。……

高臺、一家で言ふ……襖で仕劃つた、細長い一室は、催しの時の特別室。上段の席で、襖の外は一段下から、人數四五百を容るゝ廣い棧敷、正面に舞臺がある。

其處へ、世を避けたと云つた體て、小彌太と差向ひに悄然と寂しく居る。元氣はなくても、恁うして起直つて言を交はすのが、小彌太には不思議なくらゐ、孫六の容體は又思ひの外、見直したのであつた。

此の日、四五日ぶりで、はじめた叔父の家に訪れた小彌太は、門近く成つて、わや〳〵と人聲が響いたのを聞くと、驚破と胸を打つたほど、憂慮つて居たのであるから。

去かし、駿河臺の裏小路の日中の戸外へ、其の人聲の、力强く、漲るが如くに響いたも道理。座敷に集つた見舞の連中、いづれも能樂界屈竟な若手の面々。で、卓子臺を二個繋いで、四人づらりと紋着を揃へて、ビール

の瓶やら銚子やら。……病人で取込みの處、肴らしいものも無かつたけれども、二種三種で、……珍らしく髪を結たてのお縫が、茶の間にお燗番と云ふのを勤めて、叔母は臺所を指圖して居るらしい。

其人々が、膝突合はせ、肩を寄合つて取劵いた卓子臺の片端に、一人ぐつたりと手を支いて、それでも些と飲つたか、耳朶を赤くして、釣船矢右衞門控へてござる。

と云ふ處へ、小彌太は勢よく入つたのである。

顔は合はす、が、仕事が違つて、然まで心易くはないので、つひ通りの挨拶する、とすぐに茶の室へ、と思つたが、お縫と並ぶのを見せがましいので、間を開いた、古代八角時計の今でも掛る、柱の根へ坐を寄せた。

が、腰も落着かず、叔父の容態を訊く。

「お宜しいです。」

「祝盃を擧げて居ます。」

「此の通り。」

と猪口を片手に銚子を添へて、衝と兩手を擧げたのさへある。

小彌太は、はじめて吻と息を吐いた。

然も、時雨の水に流れたのが、降りかはつて、銀河から霜と一所に降りたやうに、思ひも掛けず手に戻つた、當家秘藏の龍神がへし、（浮草小町。）此にあり。

其を叔父の手に納めに來た――深川の昨夜の今日――て、面は、頸に掛けて、堅乎と内懷に守護して居た。

お縫に、聲を掛けやうとした時、件の高臺で、ト一ッ拍つて、間拍子を外づして遣り直したかと思ふ冴えない手の音が、ホトンと鳴る。

「あい、」

と立つて、お縫が通廊下をばたばたへ片手をのせ、繃帶の手をもそりと垂れて、眩しい目つきを半眠りに、も

の珍らしさうに我家の天井を仰いで見ながら、足を摺ずらして、よぢ〳〵と孫六老體が顯はれた。

怪我してから、茶の室へ出たのは、六日目の其の日が、初めてゞあつた

と言ふ事。

二十六

「やあ、若旦那、」

と矢右衞門が、會釋より前に伸上つた、が、片膝支いて白足袋の踵で極つて、びたりとした腰形は、八十五でまだ尾を見せぬ、孫六に十年の古コンクワイ。

お縫に漸つと坐らせられた、孫六は坐に着いて、瞼をまじ〳〵と、一座を見て、それから、……ほうけた公蒲英とある、頭を下げたが、胸に入れた繃帶の手の甲へ、痩せた頤の附着いた狀は、見る目も窪むまで衰へたもの

のであつた。

「これは、誰方も、難有い。」

叔母も出て、嬉々して、叔父、甥の中へ、膳が一個。別に据へられた頃には、若手の氣焰は當るべからず。こゝに墓から出た狀の、病人を祝するために、彌が上に壯に成つた。

「大先生、然うお元氣がなくちや不可ませんね、――毎度難有い――なんて見舞をお喜びなさるやうぢや心細い。」

「不斷の調子で、や、並んだ獸は散切かい、大森鬘で可、島田髷で顯はれろと、あの、御勇氣でなくつては。」

「第一、若いのを傍にお置きなさらないから、餘計に年をお取んなさる。」

「お縫樣がおいでぢやがの。」

と時に矢右衞門が口を入れた。

「君だつて、」

と可恐く、若いものに扱つて、
「内々探して居るんぢやないか、」
「經師屋の方が本聯でせう。」
「これは、如何な事。」
と爺樣は疊んだ手拭で口を拭いて、其のまゝ默る。
「えゝ、先生、先生がお好きな、越後上布に緋縮緬で色白と云ふのを何うなすつたんです。」
「お待ち〳〵、塞だと云ふのに、越後上布を何うするんだい。」
一人傍より、
「結構です、長襦袢一枚だと思へば、大抵同一でせう……雪の降る晩なんぞと來た日にや、〜ッ、」と頰邊を敲く。
「理だね。」
とはじめて口を利いた孫六は、猪口一ッ取らうとしては、ぶる〳〵と震

へる指を、其れなり引込めて、まだ飲まず、目を眠る。
「でせう、帷子に緋縮緬なら。何でも構ひません、是非介抱人にねえ、」
「大先生、此の人は、それで、お下りを頂戴と申すんでございます。」
「馬鹿、汝ではあるまいし。」
「否、事實です、近頃八方塞りて、」
「塞りもね、玄かし、それは違ひます、此人は專ら、年增を。……」
「止せ、止せ。」
と二の腕を摑んで、ぐいと引く、と引かれたのが、小さな聲で、
「此處へ觸らせるんぢや、談判が届くッてね。」
「眞個か。」
「此奴當つて見る氣だな、大先生、此の人は？」
「止せ！」と又腕をぐいと摑んで引く。
「其處だ、……其處を喰着いた。」

「畜生め。」と故々端の方から、一人づいと立つて出て、右の(其處だ。)の背中を撲す。

ワッと笑ふ。

いや、壯なる事かな。

此の間に矢右衞門狐は、つるり、と海鼠腸をして遣つた、唇を甞め〳〵、何か寂しさうに爺樣がいはゆる――若旦那の姿を見る、と見らるゝ七十五の若旦那は、お縫が一寸敷いて置く、膝の手帕の上へ水涕をぽた〳〵落す……其の癖片手にづかりと折つた、懷紙をたしなむのを見て、小彌太は胸を抱いたのである。

二十七

話頭が一轉した時、小彌太は、じりゝと其の四天王に膝を向けた。

「何うしたんです。」

「えゝ、實はお縫さんも困つて居らつしやるんで……ねえ。」

お縫は默つて頷いた。

「霧島皐月と云ふ、それ評判の女優ですよ……」

こゝにも一人、月岡霞、と小彌太は人々の顏を視た。

「其が？……」

「此の間九段坂で、大先生がお怪我をなすつた時、車を飛ばして通り掛つて、……お勤り申して、飛んで居た下駄まで拾つて、お世話をした、其の美人なんです。……」

「皆が評判でした、あの日、能樂堂へ來て居て、其の歸途だつたさうですよ。」

「直ぐにね、翌日から毎日のやうに、お宅へお見舞に來るんですがね、先生が、よく禮を云へ、とおつしやるばかりで。叔母さんと、お逢さんに、玄關で立切らせて、何うしてもお逢ひなさいません。」

「先方はね、(豫てお目に掛りたいと存じて居りました。此を御縁に。)なんのつて、品ものは持込みますね。昨日なんざ、叔母さんもお縫さんも困つ了つたつて、私と此の人とで斷つたんですがね、」

一人口を入れて、

「病院へ押掛ける、金色夜叉の滿枝つて處ですな。」

「全くだよ、お前さん。」

と膝に手を組んで叔母が其の時……

「何うしてお逢ひなさらないのかね、氣の毒で困るんでございますよね。」

孫六は、じろりと見たばかり。

「先生は、實際手近な處、あれを、お引附けなんか、洒落れてるんだけれども。」

「いや、……洒落れてるより妙藥なんだよ。」

「そんな藥があるんなら、私も九段で轉びたい。」

「小彌太さん、」

と從姉が呼んで、

「今日は丁ど可いから、貴下が取次いで下さいませんか。」

「叔父さん、」

と杯を置いた時、……打傾いて聞いて居た矢右衞門も、向ふから若旦那の顏を覗いて、

「何うしてお逢ひなさいません。」

二つばかり掠れた咳して、

「兎角太儀でな。」

と云つて、元來が凛然として聳へた肩が、ズッと落ちて、膝の上へ、ぶる〳〵と手を辷らした。ト同時に、ほうけた頭を下げて、

「いや、誰方も——此處へ別嬪が來ると困る……」

口々に、お大事に、お大事に、先生、お大事に。

「若旦那、高臺へお引取りか。」
と矢右衞門は、なごり惜さうに、又伸上つて言つたのである。
「棚の達磨とします、いや、くすぶつたものさね。」
と若旦那、頰をがつくりと苦笑して、
「腰拔けを賴むぞ、やあ、えい。」
とお縫の背に縋つて立つたが、
「一寸、此方へ……」
と其の時、何氣なく小彌太に聲を掛けた。甥は飛立つばかりに思つたらう……氣を急くばかり、恁る席へは持ち出して所謂が言へる面ではなかつた。……
「御緩り……後で、女優でも論じませう。」
と立上ると、仕出來した我が過失ながら、こゝに償ふべき懷中の(浮草小町。)に、廊下を傳ふ中庭越、小彌太は何か嬉々した。

——さて、差向ひに成つたのである——
「お前のもお狂言師か。」
と病氣も交る縺れた舌で、便なさゝうに煙管を取つて、
「俺の方も女役者だとよ、兩花道は尋常ごとでない。どつちか一個は化ものだろう。」

二十八

「はてな、——居ない、居ない、ばあ——は可厭だ。で、顏を見せると、目の球がぶらりと出たか、ふん、」
と若い時の一人旅、一本差の、のめり笠。道中合羽を吹煽つ、箱根の暴風雨の夜路して、褰の河原に、ひら〳〵と白いものゝ動くを見たより、可恐い事を覺えぬ云ふ叔父が、此の時、陰に籠つた顏して、

「何とか云つたな、名は？」
「女郎のですか。」
「おいらんと言へ、俺の前だとて遠慮はない。可哀相に……」
と眦の、尙ほ其の上へ皺を刻んだ。雖然、浮草が返つたゝめか、思ひの外に呂律も亂れず、
「茶飯行燈、それは覺えた……今の其の面を被つて居たと云ふは？」
「月岡霞――と云ふんです。」
「は、化ものにも名があるか。」
と又世に疎いものを言ふ。
「叔父さん確乎なさい。」
と小彌太は笑つたが、
「おい〳〵、」……と鼻をかんだのを見る、と翁寂びたのがうら寂しく、引入られて色を沈めて、

「化ものぢやありません。其の婦は氣が違つて居るんです、――世間體は、たゞ病氣のために久しく芝居の方も休むでる事に成つて。
最も豫て病身な處から、深川の、木場の可恐く婆婆氣な年紀の少い材木問屋が、不斷色氣離れた……と云のに詮索は要りません、……大贔負の處から、それ〳〵へ運びを附て、木場の其自宅の何です、數寄を凝した離座敷と云つた處で、養成をさせました。湯治場廻りも飽いたと云ふので――
其の座敷が、肱掛窓の欄干から、すぐに水で、襲ね蒲團で、釣も出來れば、盧の月も汲めるんです。
自由がきいた我儘もあるんでせう、ぶら〳〵疾病、どつと寐て居るつて程ではないので、月夜なんぞ、川筋をぶら〳〵歩行く。……容色は固より、評判な姿の可い、身體に品のある婦なんですから、水を隔てたり、橋の彼方此方で見たものが、辨天樣の御影を拜んだ　お姿をあり〳〵と……分けて界隈の婦たちが眞面目に風說をしたんださうです。

彼處の辨天樣は、よくお立出に成る、高い塗下駄をめした、それが、晃々と光つて、からころと音がして、あの、池の向ふから拜まれると、昔から言ふさうですね。」

「言ふよ。」と孫六は目で頸く。

「貴女を辨天樣だつて申します。否、眞個の御堂の中の……かなんか、傍のものが言ふので、つひ自分でも許す容色だもんですから、好事に、歩行くのを夜分池の周圍ばかりにして、月夜には……暗夜だと故々鐵燈籠を女中に持たせて、それに特更に棲下ばかり低い處を照らさせて、からん、ころんと……別誂への高木履に、晃々蒔繪を蒔かせて、しまひには白無垢で、片化粧なんかしたんですつて。」

「事を好んだな、はあ。」

「怪しからんぢやありませんか。」

「いや、然までもあるまいよ。」

とむづ〳〵と顏を掉つて、

「婦が、辨財天にあやかる……學者を眞似るより殊勝しからう、容色自慢も、美しければ、歌を詠むより賴母しい。」

と又早や世に後れた事を言つた。が、小彌太は――仔細あつて、恁う言はれるのに便を得た。其處で。

「眞個です、叔父さん。」

「けれども、惡くすると、八朔の傾城めくな。」

二十九

「處が其のおいらんなんです。叔父さん、此は冬木の辨天樣へ、……茶斷鹽斷……と云つた處で、茶も鹽も勝手には成らなかつた落魄れやうてありませうが、……斷食と云ふ程一念で、毎晩日參をしたさうです。――其の目の球の赤剝けにぶら下る、骨と皮ばかりで、下腹の膨ばむ、難病の願掛

けに。

此が一夜、霞と御堂で出逢ひました。」

「は、はあ、容易ならぬ。」

と煙管を頬に煙を留める。

「半狂亂です。裾に縋つて、伏拜むと、役者だけに心得て、すつかり女神になり澄まして、(治して遣る、)と言つたんですつて。

勿論、花が、其の色、其の香を、他と競ふやうに、殆ど、自分の職として、美しくなければ成らない美しさに、美しいのはほこつても、人の醜いのを嘲つたり弄つたりする婦ではないつて言ひます。

霞も、實際、豫て聞いて、聞くだけも慄然とする、居まはりでも風説の高い、おいらんあがりの、其の難病は知つて居たさうですから、眞個、あゝ氣の毒だ、可哀だと思つて、……辨天様と思ふもの……少時でも氣の易まるやう、慰むやうに……其のつもりで言つた事ださうですが、——人間、あはれむのは可い、氣の毒がるのは可い。けれども憐まれたり、氣の毒がられたりするくらゐ、そんな情い事はない。」

「むゝ、……」と孫六は深ひ息。

「……知れずに濟めば無事でした、けれども其が知れたんです。

其まで、たとへやうのない屈托をして、生命がけの心願したゞけ、さあ、夢でも、現でも、現在治して遣らうと告げられたので、草が蘇つたやうに成つて、非常に喜んで居たさうです。

處へ、虚だと分つたでせう。辨天様は霞と聞いて、それが人も知つた美しいのだ、と云ふだけに、えゝ口惜しい、口惜しい、と赫と逆上た。固より心痛のために、氣も上づゝて居たんですつて……石置場へ沈みました。

と二三日、死骸が上らなかつたつて言ふ事です。

霞は湯上りの膚へ、櫻の影で、我ながら、姿も心も世に類なく、ほんのりして、其の肱掛窓から、春の暮を視めて居ました。

秋のやうに水が澄切つた日ださうです。
鰻でも水の上を渡ると思ふ……黒い筋がスーッと浮いて、急ぐやうに近寄つたんです。
最う、欄干の下、二三間さきから水死人だと知れました。
直立つて言ひませう、あの形で、両手をぴつたりと両傍へ、腰の左右へきしッと着けた……浮いてるのは、其の頭の髪の解れたので、がつくり、叩頭をするやうに俯向いた。が、すつと、水の中に立つて居る。
肩が、水面へすれ〳〵で、紺の筒袖の尻切なのを一枚着て、帯が無い。
重石を着けたやうに裾をひた〳〵と巻いた切が蒼味がゝつて、透通つて、眞白な胸が、乳もふつくりと、脈を打つか、蒼い筋。
それは活きてる時も、まつたく色の白い婦でした、」
とフト默つた。
庭越の座敷には、折から、火の燃えるが如き笑聲。襖の外は、何處とも

言はず、枯野の草、空棧敷が、凩を吹上げると、舞臺の屋の棟を掛けて、ぎしり、みしりと鳴る。
小彌太は炬燵へ擦寄つて、
「其が其の寒いやうな水に透いて、半身が見えたと言ふんです。が、腰は、裾は、矢張り見えて居て、そして、何れだけ長いんだか、づゝと水底まで届いて、まだ、其の下へ、する〳〵と曲りもせずに眞直に成つて限りがない。……」

三十

「其が、急ぐやうに、スーと流れて來たんでせう。ですから、遁げる間も退く間もない。あ、あ、と霞が。
欄干の下を通ると見ると、水草の根が切れたやうに、底から、ぼろ〳〵と靜かな水銀の泡が立つて、ぶくりと仰向に成つた顏が、其の赤めくれの、

どろんと目球がぶら下つた――私は話すのも氣の毒です――一目見るうちに、何うしたんだか、手は手、足は足と一ッづゝに岐れて、首も離れた、乳のついた、腹ばかりが、先へ立つて、づる〳〵引ずつて流れて行く。

大概なものでも、――叔父さん、其を、何と……袖へ花片が散つて掛つたのも、其のまゝにしやうか、拂はうか、と一寸苦勞をする女。土左衞門の、そんな顔を見て、氣に爲ないで居られますか。何うしやう、何うしやう、あんな顔に成つたらどうしやう、と其ばかりを苦に病んで、寢ても忘れられなかつた果は、霞は氣が違つて了ひました。

自分ぢや、霞は、……それですから、目の球が兩方、頰邊の上まで下つて、額が拔上つて、腹ばかり膨んで、身體は骨と皮ばかりと、狂つた心で、然う堅く信じて居ます。

ですから昨夜、夜中に、深川の川岸の材木の中で、私が其の面を見着けました時、――貴方は、大事な面を剝がせて、目のぶら下つたのを見たいのですか、（ばあ。）」

「氣取るな。」

「――ばあ――と袖から顏を出された時は、思はず、膝が、がくんと成つつて。」

「腰を拔いたか。」

「え。」

「時々拔く……」と苦笑。

「其の癖、其の美しさつたらなかつたんです……私は死んだ婦の事ばかり氣にして居たもんですから。……

寒參詣が後からついて來た、と思つたのは、然うぢやありません。霞を探しに出た材木問屋の男ども、弓張提灯で、同じく照らして、其の少い主人も居ました。

茶飯屋の親仁も憂慮つて、其處へ見に來てくれましたよ。――もやひ身

上で、死んだ遊女と實は同居して居たんですつて――梅川の行燈は、供養のために、玉菊を弔ふほどな意氣組の燈籠のつもりだ、と然う云ひます。

此方は、面を取戻す……其の話が又組むので、材木屋の主人も斷つて、と云ふ。昨夜は木場の其の霞の座敷で泊りました。可厭な事には、病人が、何時誰に聞くつて事なしに、死んだ婦の、不斷、饒舌つたり、言つたりした事を覺えて、同一やうに遣るんですつて。辻褄の合はない、續きの無い、蒼空へ、颯と雨が降るやうに――小彌太さん――と呼ぶ事がありましてね、其處に居るやうです。えゝ、腹の中に、天井裏に、屋の棟に。

此方も惱拔いて、夜が明けた、と思ふと、がつかりして、埒くちはありません。正午まで寢て、それから此方へ參つたんです。

歸る時分には、霞も、すや〳〵と寢て居ました。

何でも、流れて來た死骸を見ると、途端に半鐘を打つて摺るやうに、胸へドンドンと責めて來た、激しい動悸が、其つ切、今以つて鎮まらないさ

うなんです。

霞は又、豫て氣にする處から、遊女の其の目のぶら下る病氣つてのを、――止せば可に、醫師にも熟く聞き〳〵すると、はじめは心臟病でゞもあるかと思ふ、激しい動悸で、其の動悸で、血も肉もふるひ落して、腦の奥から、トン〳〵と、恁う日に增し前の方へ目の球を突出すやうに成るんだ、……と其を知つて居たもんですから、鎮まらない動悸を氣にして、目を突出す、目を突出すつて泣いたんですつてね。」

成程、今以て、鎮まらない。美しさは尙增したつて云ふのに、動悸ばかりは、寢て居る時も、手の先へ傳つて、指が横刻みにぶる〳〵。」

あゝ、惡い事を云つた……

三十一

頷くのが病氣らしく、叔父の顏がふら〳〵と横に搖れて、

「はあ、手がぶる〳〵……」

と釣込まれた體に、孫六は、着膨れたが折目の正しい、無地の一樂の袖を衝と開いて肱を張る、ト衣紋に屹と添ふ手練の位。舞扇を手に恁う指さば、月も花も誘ふべし、龍宮の浪も捲くべく、鬼神の影も宿さむを、何事ぞ、袖口に手はすくんで、指はぶる〳〵と肩から震へる。

熟と其の袖を流眄に掛けて、

「何だ、此方は、よい〳〵か。」

とハタと、檜笠取つて擲つ如く、炬燵に落すと、――丁ど掛蒲團に懷紙折敷いて、金襴の袋のまゝに据えてあつた、浮草小町を、わな〳〵と取つて、引寄せて、膝に置く時、フト心着いたやうに、はじめて繃帶の左手を下ろして、膝を組んで、搔抱くが如く、差俯向いて、

「手も震へるか、氣の毒だな。」

「それで居て、寢て居るうちも、其の面をかぶるんです。――面は、矢張り、私が遺失したか、奪られたかしました晩、月の時雨に、冬木渡で、霞か目敏く見着けたんで。

船に居たのは霞でした。

季子の劍、と材木屋の主人は、額を壓へて言ひました。豫て五大力の新造へ、自分の座敷から、欄干を飜然と乘つて、大川へ遊びに出たい、と霞は昨終望んださうで。人の榮耀と云ふものは、水を廊下に爲たいらしい、驕つたものは、昔から、よく遊山船を造るんです。處が、出來上つたのに、當人の氣が違つたのは遺憾い。切めては、と其の船を漕出して、隅田川から、川施餓鬼をしながら戻つたのが、其の晩ですつて。

叔父さん、此の面をなくしたんでは、私は腹を切らうと思ひました。

「嘘を叱け、」と、又苦笑する。

「拾つて被つてる婦が居るんですもの、霞の氣違ひ、飛んだ目に逢はせました。」

「落したのはお前の癖に。」
と優しい顔して、
「別嬪は、拾つてくれた恩人だ。いや、何にしても、無事に戻つて俺は嬉しい。」と錦のまゝ、兩手に翳して押頂く。
小彌太は、此を見て猶豫つた。
「叔父さん、」
と呼んで、又出直して、
「……それで、實は……其の事に着いて、少しお願ひがあるんですが、何ですか、叔父さんは、女役者はお嫌ひですか。」
「お尋ねで恐入るな。女は好きだよ。」と口を曲めて、皮肉な鼻の前、フ、ンと鳴らし、
「御念に及ばん。若い時お狂言師に惚れたのがある。……妙な事を何で訊くよ。」

「けれども、九段で介抱したのが、毎日のやうに見舞に來るのに、叔父さんは、お逢ひなさらないと……彼方で、今も。」
此を聞くと、ぶる〳〵と膝を拍つて、胸で息して、
「同じ藝人、疎略には決して思はん。技の熟未熟は其の仁の修行次第。役者だと云ふて婦と云ふて、遠ざけるでは毛頭ない、が、小彌太、」
と呼んで、顔を見て、目を閉ぢつゝ、
「あゝ孫六は年紀を取つた。女は分けて對手の男の顔を見る。……舞臺に立てば、姫も御前も參られよぢやが此の、よぼ〳〵の皺面が。」
と骨ある拳を確乎と握り、
「炬燵の臭氣て逢ふて見ろ。老ゆれば孫にも侮らるゝ……修驗の法師や、羅漢でない。能役者とて藝人だ。やれ、薄汚い爺ぢや、と婦一人にも思はれては、流儀の恥辱、俺の名折れよ。……普通の娘は然うも見まい、藝人だけに心外でな。」

と羞づるが如く面を伏せる。

三十二

「然ればと云つて、見舞とある。遁げ切りにも成るまいが。處で、まだ得起ずと寢て居る時から、此の面をお前に急いだ。

面を着けて、面を被つて逢はうと思ふ。最も、面は他にも多い。同じ浮草の模寫と云ふのも、二つ三つは心得て家にあるが、中にも第一の名品を撰んだは、先方が藝人ゆえに、其の藝に對する禮儀だ。

西不垣のお花を狙ふ坊主ではなけれども、謠講中のお布施をくすねて、柳橋へ獺で出た。……化ものとでも言はれう事か、粹な年增がお爺樣、若い妓に御隱居樣、と言はれてな、最う弗りと其つ切、白粉の香を知らぬ事、それから丁ど、やがて十年。

女役者に面で逢ふ、眞晝の花に頰被よ、月夜に簑だな、山田守る僧都と

こそは成つたもの。

小彌太、お前の母親は、若くつて死だつけ。とぼた〳〵と、あゝ、水涕。

小彌太も思はず、ほろりとした。

「時に、其の賴みと云ふのは何だな……」

と打解けた體ながら、張つた氣の弛んだとも見える、胸を緩りと炬燵に凭れる。

「えゝ、ですが、何ですか、今のお話で、思ふやうに口が利けなく成りました……最う申すまいかと存じます。」

「言つて見ろ、遠慮は無い。はあ、何か、——それにつけて、——とあつたつけな……面の事か、小彌太。」

「はい。」

「何か、此の面が欲しいとでも言ふか、其の別嬪が。」

「否、材木屋の主人が手を支いて賴むんです、霞は固より、昨夜も今日も

離すもんですか。寝て居る處を、そつと外すと、アッと言つて刎起きる。手足を傍で壓へました。見て居ると、活きながら顔の皮を切離すより殘酷なんです。

最う、面が手に入つてからは、自分の顔がもとの通りに治つたと思ふかして、美しいでせう、美しいでせう——と嬉々して、同一氣が違つて居ても、然して不斷とかはりがなく、嬉しさうに活きて居るのが、せめてもの心遣りだと、傍のものが皆言ふんです。」

「むゝ、寝ても小町、覺めても浮草、面を雛さぬ手も震ふか。」

と衝と引いたる片袖は、最明寺殿を麾く、佐野のわたりの趣あり。雪もちら〳〵と袂が搖れ添ふ。

「不足なく寄る年なみ、天道が刻むだ皺さへ、罪なきに天の網かと情ない。察し遣る……其別嬪。餘りに最惜い。

が、小彌太、お前もちよんきなだ。

と調子が碎けてニヤリとして、

「婦ゆゑには性根を亂いて、けちな謀叛の連判狀に、針で血判を仕兼ねぬ野郎だ。」

「えゝ。」

「何か、娑婆氣な、其の材木問屋など、木場の鹿ケ谷へ集つて、實生別家の重寶を奪ひ取り、穿違へた所作事に、其の婦に着せて出して、喝乎と天下を覆さうと云ふ企ではないか。」

「否、叔父さん、其がです。藝の方で、心願掛ける、守本尊にでもしたいと云ふと、またもお願ひをする勇氣があるんですけれども、霞のは唯、美しく成りない、と其ばかり、顔を氣にして氣が違つたつて心得違ひで。」

「慌てるな、突走るな、其だから、お前は、ちよんきなだてえ。美しいは女の藝た、姿だ、德た、位だ、それが知惠だ、且以つて道だよ。あゝ……其の死んだ遊女と言ひ、實に察しる、美しいがために活きて、醜

きが故に亡びる。身を投げた、氣が違う、可哀ぢやな、且以ていぢらしい、あゝ。」

とべそを搖いたる口つき。

三十三

「いや、鬼神に横道なしと言ふ、心ばかりも、其の婦が美しく成つた、と思へば、死んだ遊女の功德にも成るであらう。

面は惜まぬ。」

「叔父さん！」

「が、小彌太聞け。浮草小町は俺が家に傳へたが、此一人私すべきもので ない、流儀の寶ぢや。人間淺間しい我利々々の身贔負には、同宿ならばお前さな。けれども、小謠の一つも成らぬ、切めてはお縫が、」

と老の目に、堪へあへず、掌をひたと當てゝ、

「舞も鼓も見眞似、聞く眞似、人並には心得たが、此は婦だ。凡て家に藝を傳うるに、女子が中を繼ぐと跡が絶える。……又慌てるな、女役者を言ふのでない。

すれば、あれ、あれを聞け……騷ぎよ……な。……あの中には橋辨慶の稽古の時、大薙刀を飜然と使ふて、足蹈をしたと思へ。……何か怪しき臭のする綢帶の切を落して、撞と成つた鬼若な、京へ行けば一見茶屋で、羽織を脱いだ由良之助よ。かつぽれの大家も交つて……豪傑原、いや、其が賴母しい。

都育ちが揃つたわ。身代りの首澤山、一人を見立てゝ讓るべき諏訪法性、お前と云ふ狐めが綾なして、ちよろりと姫君に拔かれては、我が私に成り過ぎて、第一本家の大師匠にも相濟まぬ。

斷つて讓られれん。が、容色のために、もの狂ふ、殊勝さもいぢらしい。

はて、」

と活きたる面の如く、と寂とした。
座敷の方も寂然する。
「思着いた小彌太、明日にも、其の人をこれへ呼べ。」
「霞を。」
「いづれ附添も來やうが、其は別に控へさせて、別嬪だけ舞臺へ連れろ。こゝに、小面、泣藏、美女の面が數ある。浮草小町の摸寫もある。四天王の面々に、老いたれども獨武者よ、俺とゐに五人な、同じ面を並べて見せるわ、一念なれば見分けが着かう。其の中から、其の女に此の名品を撰ばせろ、見事見分ければ……確と讓らう。
よし又、ものを見損じて、今出來の面に手を掛ければ、其以て尙ほ仔細ない。當人の心さへ濟めば重疊ぢや。むゝ！……」
と又ハタと手を拍つたが、辷ると他愛なく膝に支いて、
「善は急げ、翌日と云へ。」

向ふ座敷は大陽氣で、
「鶉舞を見なさいな、〳〵、」と一人が囃す。
「唯今の肴に、鶉一羽射んとて、小弓に小矢を取添へ、彼處や此處と探いた、」と矢右衞門の聲である。
「鶉舞を見さいな〳〵、」
「さればこそ鶉が、五萬ばかり下りたぞ。多き鳥の事なれば、うそも些と交つた。」
「鶉舞を見さいな〳〵、」
「興がつた鶉で、一羽も騷がぬは、弓の下手と思ふか。唐土の養由は、雲井の雁を射落す、我が朝の頼政は、鵺と云へる化ものを、矢の下に射伏せた。」
「鶉舞を見さいな〳〵、」
「其ほどにはなくとも、射て呉うぞ鶉と、一の矢を番へて、よつ引き弾と

放せば、一の矢は外づれた。」

「鶉舞を見さいな〳〵、」

「二の矢でしてのけう、二の矢もひよろ〳〵、靜まれ、童、そのやうに笑うな、三の矢で射て取つて、羽を拔いて取らせうぞ。」

「鶉舞を見さいな〳〵、」

「三の矢もこそ〳〵、これほどの鶉に、弓も矢も無用な、一度に手取りにしてくれう、」

哄と笑ふ。……

「手塚の太郎と引組んで、討死々〳〵々。」

と屋根廊下を棧敷の續きへ、生年八十有三の矢右衞門、若い聲を擧げて大人氣ない、大分過ごされた、てら〳〵の兀頭を、高臺へむくりと顯はす。

「御老人、見物は何うだね。」

太郎冠者、やゝあつて、威儀を正し、膝にしやんと手をつき、

「御上覽以來のお催し、一段でござる。」

其の上覽の時や如何なりし。何時の催しにも恁ばかりはと思ふ。森嚴なる威儀を正して、黑小袖、勝色小袖、十ウの袂、袴の色々、五つの綾、黛同じ上薄が、冷き霜の橋がゝりを、雲の深山の松の影。二の松、三の松かけて、足に落葉の塵もなく、墨繪の天女の俤揃えて、錦の帳を出てたるぞや。浮草小町は誰ならむ。

就中、新海孫六兵衞が七十五歳の端麗さよ。

驚かれたのは、其のみならず、見物の釣船矢右衞門、此爺樣、肩に掛けて、風呂敷づゝみ持參とあり。平時は經師屋が內職ゆゑ、孫六が豫て註文の、狸の表裝出來か、と思ふと違つた。麻上下の紋着で。これは憶病口へ、すいと廻る。

霞を乘せた自働車が此より前着いて居た。

堅川とて、其の材木屋の、若主人も、羽織袴で、女中たち二人と來たが、座敷で、叔母が出てあひしらふ。

其の日、霞は美しく髪を上げて、白に裾模様を襲ねて居た。介添して恁う出て立たせた、主人も床しく、其の人は尙ほあはれであつた。

棧敷の歩行を、優しく霞の手を取つて、導いたのはお縫である。

「さ、何うぞ、御師匠さん。」

小彌太は此を聞て、人の世の藝人の榮譽を思つた。霞をお師匠さんと云ふ、――一人殘つた――孫六の、此の末の娘は、幼より飼鳥に鼓打つて聞かせ、齊眉く人形に舞ふて見せた、所帶をつもる二尺指、肩を拍つのも法に合ふ、比類なき仕舞の上手である。

潜りを入ると、深き樂屋の大姿見に、二人の姿がちらりと映つて、其から、やがて橋がゝりを手を曳いたが、背後へ廻つて、靜と据える。……霞が舞臺に着いた時、お縫は小走りに引返して、高臺を背後に、小彌太が彳

むだ傍へ來た。

其の時、豫て差置いた、舞臺に五ッ、用意の床几、葛桶はありながら、袖を聯ねて、端然と立つて居た。五人の中に、太皷の坐のあたり、一人正面に向直ると、劔の如く鍛えた聲して、

「やあ、小彌太。」

と呼んだる孫六、

「俺に別嬪の惚れる處を、後學のために見て置け。」と言ふ、三年ぶりの大音である。

小彌太は、お縫と棧敷に並んだ。

時に、葛桶にすらりと掛けた。揃つて、屹と霞を見る。氣組は然れど、俤は、氣高く靄丈たものであつた。

ト命ぜられたる如く、しだらくに坐つた霞が、はらりと立た。が、彼を見、此を見、行き戻り、繞り、廻り、起つて居て、惱み、亂れ、惑ひ、迷

ひ、徘徊ひ、松を叩き、柱を探り、揑と倒るゝとすれば、はッと起きる。…ト恰も拔持つて膝に當てた、舞扇の疊んだ色が、晃々として、絶壁紺青の怪しき巖に仙境の月幽に映して、裂目の草を射る中から、五個の顏が、差覗く。……霞は、あはれ、貴に艶なる數の魔に弄ばるゝ趣見えて、あせり狂ふ身は袖二ッ、襲ねて幾つ、振明、八口、すだ〳〵に裂けなむとす。

「冬木の辨天樣を念じて上げませうよ、お可哀相に。」と俯向いて、お縫が袖を合はせた時よ。

樂屋を拔けた一廻り、揚幕から立直つて、鷺がト舷へ留つた體に、上下着けた釣船矢右衞門。偉大なる白き胡蘆を横ざまに着けたる體に、いざふれ、あり合はせた造り船を、袴腰に挾んで、する〳〵刻足に衝と舞臺へ出ると、ハタと据えて、えい、と乘り、座を構へ、

「船を進せう、五大力ぢや。それ、めせ。」

と言ふ。

霞は欄干を飛ぶ如く、飜然と嬉しさうに乘移つた。

舞腰に姿極つて、矢右衞門、船の艫にびたりと着き、扇を丁ど艫に繰り、手びさしをづいと翳して、

「比良の山、伊吹ヶ嶽、さても日和ぢや。……これは〳〵！おゝ、黒雲が颯と出た、南無三寶、隅田川から時雨て來たわ、驚破々々、深川の水も嵩增す、ざんざ〳〵。」

と囃すと、舞臺の棟の颯と鳴る氣勢。優しや霞は袖笠した。

「や、又、立所に雲の絶間を、はあ、冴えたる月かな。それ〳〵傍が波に映るわ、御覽せい。山田矢瀨の渡し船の、夜は通ふ人なくとも、月のさそはゞ自から、船もこがれて出づらん――」

と背後からおはれかゝる體に、扇子を上げて、熟と舞臺を差窺ふ。

霞も連れて凝視めたのである。

孫六の爪先が、葛桶にじりゝと動いて、腰掛けたまゝ、此方に直つて、

面を霞に向けたと見るや、肩に爽かに氣が入つた。が、何とかしけむ、着けたる面を、衝と脱ぎ、手に持ち、袖に當てゝ俯向けると、老の素面をあからさまに、矢右衞門が扇に宿して、水面に映す振一手。其の俤は尊かつた。

「あゝ、美しい、綺麗な顔が、あら、あら流れて、それ、此處に、あれえ。霞は清しく聲を立てると、はつと船を出て、熟と見て、面を合はせ、する〳〵と摺寄つて、仰いで若旦那の膝に縋つた。

老の手も美しく、其時霞の肩を抱き、

「おゝ、舞臺に映つた、私の素面が美しいか。むゝ美しいな。やあ、お女中。其の目を閉ぢるな、瞳を散らすな、一念確に鏡を見て見い、少しも兩眼に異狀はない、それ〳〵。」

と聲に力が籠つて、寶生雲の舞扇を、すらりと開いて、差寄すれば、金色の雲にきらりと映る、花の霞の暮れ行く顔が、瞼に颯と色を染めた。

「まあ……」

とわな〳〵と震へたまゝ、背も高うすつくと立つと、古稀を過ぎた若旦那、健かに腰を切つて、映るを見よとか、姿見に、舞扇子を屹と霞に向けて、肅然として立つたる有樣、修羅八萬の矢表に、毘沙門天が黄金の楯。

霞は褄を投げて、揖と成つて、はじめて夢の覺めたる如く、うろ〳〵と四邊を眴す。

其の手を靜に取つて、孫六。

「祝着千萬、大恩人よ、お女中。舞臺に立つて、小町の如く美しかれと念ずる時、お許の目に、私の素面が汚れた爺と見えやうほどなら、生効もない老耄だ。這個、皺腹搔切らうと思ふたに、此ならばまだ飲める。正氣に返られた祝儀には、やがてお酌一つ賴みます。」

と莞爾したが、疲れた體に、よろ〳〵と葛桶。矢衞右門船を乘り放つて、

「然ればこそ言はれぬ差出業をして、ついに覺えぬ大汗を搔きました。相

かはらず若旦那、これならば五百八十年、七廻りでござる。」
「何がさて、これとても、小父御がお庇ぢや、孫よりも尙ほお若いな。」
名家と名譽が面を合はせて、微笑んで相方、一揖す。
「お縫。」
と呼んで、霞の介抱を委ねた、孫六は……面を取つたが、いづれも茫然
とした、四天王を扇で招いて、
「これ〳〵――財寶が孫どもよ。――私が遣ると、茶番に成ります。若い
處で、お狂言の眞似をせう。」
「はつはつはつ、一段と可うござる……」
「財寶が孫どもよ、名は何と申すぞ。」
「興ありも候、」
「冥伽ありも候、」
「面白も候、」

と、面々、面を懷へ、小手利て、何も心得たものである。
「財寶が孫どもよ、名は何と申すぞ。」
「興ありも候、」
「冥似ありも候、」
「面白も候。」
「それよ、それよ、それ〳〵。」と矢右衞門はひよろ〳〵と、太郎冠者の醉
つた足つき。
手のあいたのが、一人、其の背後で、影法師のやうに躍る。
「それよ、それよ、それ〳〵、」
「財寶が孫どもよ……」
と三人の手車で、孫六は唄ひながら、橋かゝりを渡り返した、二の松を
過ぎた時、と扇を取つて、熟と目を着け、其のわな〳〵と震ふを視ると、
すつと下りて、押默つて、靜々と舞臺に戻つた。

シテ柱の此方に、愁然として寂しく立つたが、フト矢の如く氣を放つて、やがて足拍子をトウと入れた。

霞は恍惚と見惚れたのである。

かたゆ袖